

42613
教科書文庫

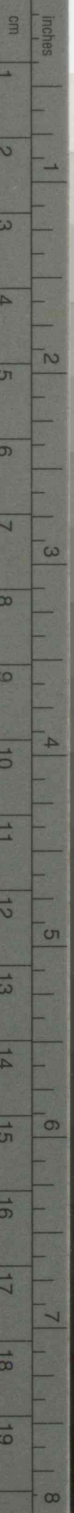
4
810
51-1930
20000 79808

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

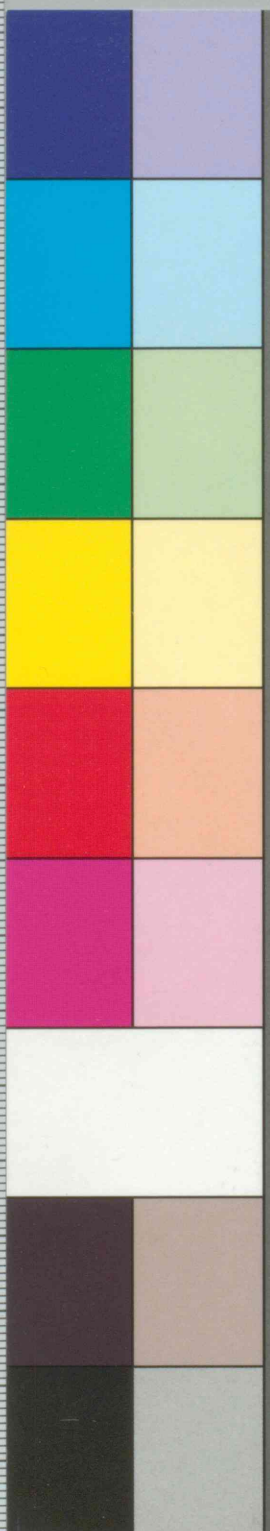
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

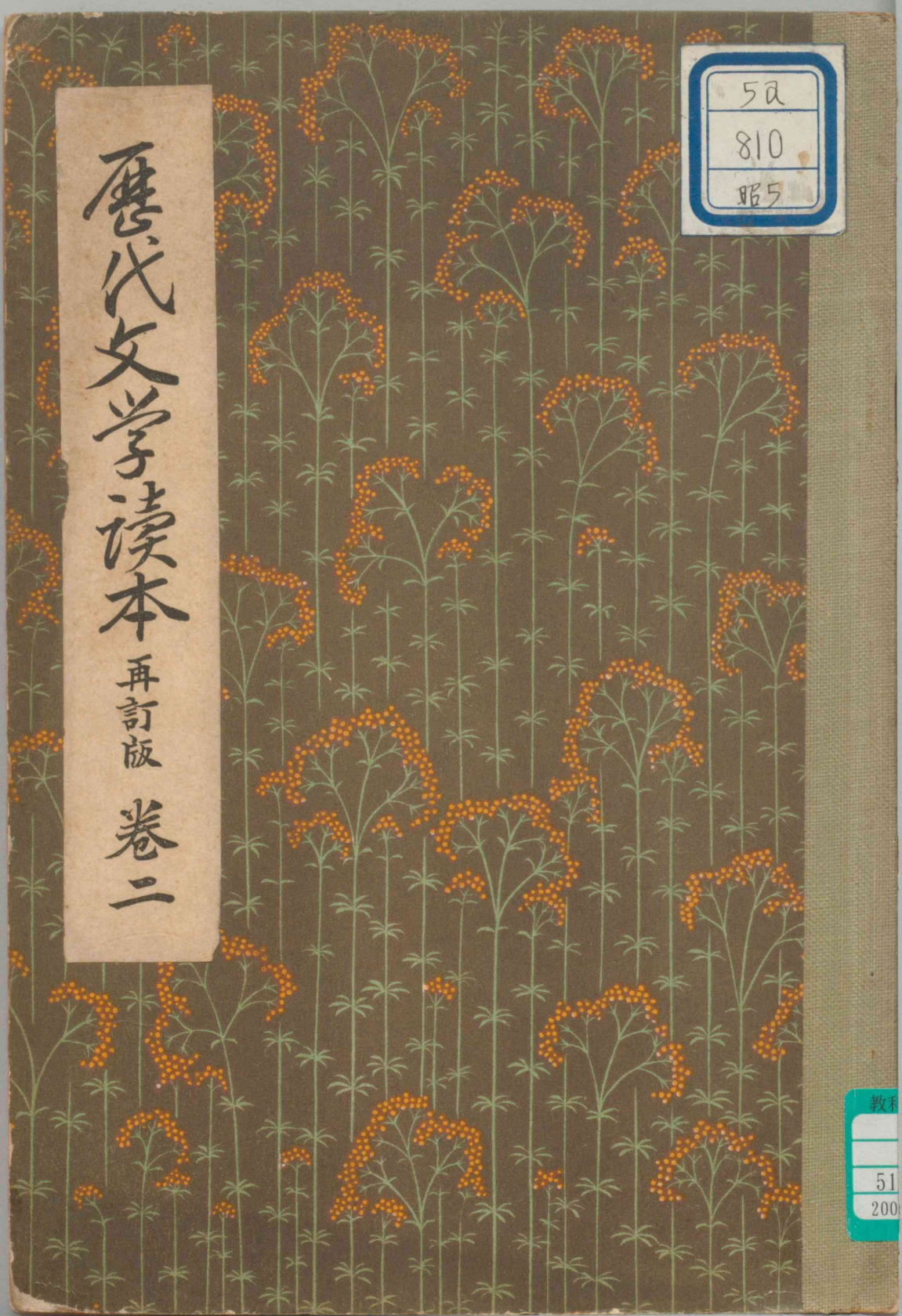
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



5a
810
865

教科
51
200

歴代文学讀本 再訂版 卷二



資料室
昭和五年二月十四日
師範學校圖書科
文部省檢定濟

教科書文庫
4
810
51-1930
2000079808

52
810
AB5

東京高等師範學校附屬中學校內
國語漢文研究會編纂

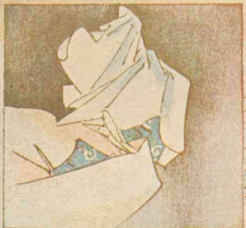
再訂版

歷代文學讀本

東京 目黒書店發兌

広島大学図書
2000079808


曾我夜討



曾我夜討
 曾我十郎景清
 大業二年八月廿一日
 曾我十郎景清
 大業二年八月廿一日

廣島大學
 教
 79808
 書

歷代文學讀本 卷二

目次

一	駿臺雜話	一
一	愚公が山	一
二	老僧が接木	四
三	阿閉掃部	六
四	小宮山内膳	三
五	乞食八兵衛	一四
二	鳩翁道話	二〇
三	放心を求む	二〇

三	椿説弓張月	元
二	山雄首を喪うて主を救ふ	元
三	重季軀を死して珠を全うす	元
四	川柳	元
五	藩翰譜	元
二	伊豆守信綱	五
三	本多重次	五
一	板倉重宗	五
四	淺野長政	六
五	山内一豊	六
六	伊達政宗	七
六	花月草紙	七

一	蝦夷のはなし	七
二	こがねを好む	七
三	晴雨のこと	七
四	ねざめの床	七
五	鷹の羽にすむ虫	八
七	俳句	八
八	義經記	八
一	牛若鞍馬いりの事	八
二	牛若貴船詣の事	九
三	辨慶洛中にて人の太刀を取りし事	九
四	頼朝義經に對面の事	九
五	如意の渡にて義經を辨慶うち奉る事	十

六	衣川合戦の事	二〇
九	狂言	二七
	柿山伏	二七
一〇	會我物語	三三
一	九月十三夜名ある月に一萬箱王庭に出で、父の事を歎きし事	三三
二	母なげきし事	三七
三	箱王箱根へ上る事	三一
四	鞠子川の事	三一
五	祐經討ちし事	三六
目次	終	

歴代文學讀本 卷二

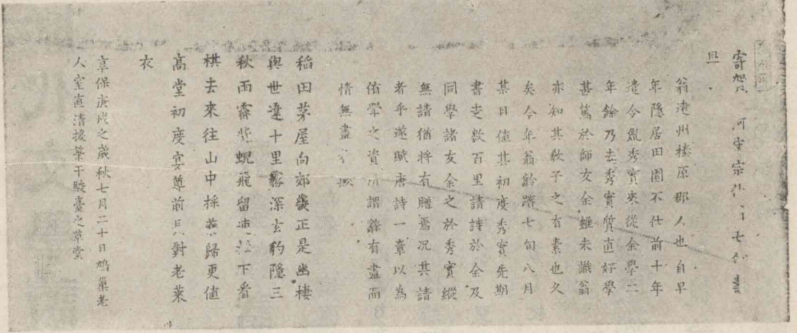
一 駿臺雜話

五卷。室直清の著。著者の學術道德に關する隨筆にして、卷を五常の名目によりて分てり。享保十七年刊行す。
 室直清は鳩巢と號す。正徳元年新井白石の薦擧によりて、幕府の儒官となる。又擢でられて將軍吉宗の侍講ともなる。邸を江戸駿河臺に賜はりしにより、人駿臺先生と號す。

一 愚公が山

諸君列子^{列子}が書を見給へりや。愚公^{愚公}といひし人ありけるが、家居ちかく山のありしをいとひて、わきへ移さんとて、日々に子ども引具

列子
列禦寇。周の
學者。



し出てつゝ手づから耒耜オノノをとりて一篋オノづつこぼち取りけるを、智叟チソウといひし人これを見て、かく大いなる山を、わづかなる人の力にてこぼてばとて、こぼち盡さるべきか。室と、其のおろかさオロカサを笑ひければ、愚公聞きて、鳩「わが代よりこぼちそめて、わが子の代にも集ツ繼ツぎてこぼち、わが孫の代にも、また其の子コの代にも繼ツぎてこぼちなば、終にはわきへ移ウツさぬ事やあるべき」といへば、いよく笑ひけりとなんしるし置ける。もとより寓言なれば、この人あるにはあらねども、愚公がいふやうなる事は、世に愚なりといへば、

愚公と名づけ、智叟がいふやうなる事は、世に智なりといへば、智叟と名づけたるならし。およそ天下の事、愚公の心ならば、おそくも一たびは成就すべし。しかるに世に智ありと稱するほどの人は、大かた智叟が心にて、愚公が山を移すやうの事を聞きてはその愚を笑ふほどに、何事もその功を成就せぬなるべし。しかれば世のいはゆる愚はかへつて智なり。世のいはゆる智はかへつて愚なり。それ故に禦寇が世を諷してこそかくはいひつらめ。いま翁オノも、百年論定まるの日を身後に期し侍れば、世の明智なる人よりみては、翁が迂濶なることを笑はるべし。されど老いひがめるにやあらん、此の志を守りて身ををはりなんとこそおもひ侍れ。愚公が山をうつすの類なるべし。(仁集)

二 老僧が接木

忍が岡
東京市上野公
園のあるところ

されば是につけて思ひ出す事あり。忍が岡のあなた、谷中のさに、何がしの院とてひとつの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、其の住僧をしりて、しばし寺に行きつゝ、木の實拾ひなどして遊びしが、住僧かたへの人にむかひて、前住の時の事をなん語りしをきき侍りしに、寛永のころの事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、御かちにてこゝやかしこ御過ぎがてに御覽ましましてけるが、此の寺へも思ほえず渡御ありしに、折節其の時の住僧はや八旬に及びて、庭に出てみづわぐみつゝ、手づから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、御側に二人三人つき奉りしを、中々やんとなき御事をば思ひよらねば、そのまゝ背き居たりしを、坊主なに

事するぞ。と仰せられしを、老僧心にあやしと思ひて、いとはしたな



接木の事
老僧の心
あやし
思ひて
いと
はした
な

ながちに我一代に限るべき事かは。といひしをきこしめして、老僧

が申すこそ實にも理なれ。と御感ありけり。その程に御供の人々
おひくゝ來りつゝ、御紋の御物ども多く集ひしかば、老僧それに心
得て、大いにおそれて奥へにげ入りしを御召出しありて、物など賜
はりけりとなん。

いま翁も、此の老僧が接木する如く、老い朽ちぬれども、ある限は舊
學を究めて、人にも傳へ、書にも残して、後世に至りて正學の開くる
端にもなり、此の道の爲に萬一の助ともなりなば、翁死しても猶生
けるが如し。古人のいはゆる死しても骨くちずといひしこそ、思
ひあたり侍れ。いさゝか我が身の爲に謀るにあらず。諸君も翁
がこの心を信じ給へかし。 (仁集)

三 阿閉掃部

古人云々
魯の先大夫臧
文仲、其の身
歿し、其の言
後世に立つ。
これをこれ死
して朽ちずと
謂ふ。(國語)

秀康
徳川秀康。家
康の第二子、
秀忠の庶兄。
越前六十七萬
石に封ぜら
れた。

余吾の湖
賤が嶽を隔
て、琵琶湖の
東北にある小
湖。

秀康卿越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて武功の譽ありし者
を、厚祿にて召抱へられけり。また狛伊勢とて、これも國にて世祿
の歴々なりしが、嫡子に鎧の着初せさせけるに、かの掃部を招待し
つゝ、子に鎧着する事を頼みけり。
さて饗膳すみ、祝盃に及びしとき、伊勢、今日は愚息が鎧の着初にて
候まゝ、御身の御武功の事物語り候うて、彼に御きかせ候へ。といひ
しに、掃部、いや某が身の上に、御話し申すべき程の武功は覺え申さ
ず候。されど御望もだしがたく候まゝ、某一生のうちに、武者振の
見事なる士を一人見申して候、その事を話し申すべし。江州賤ヶ
嶽の戦に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、敵と覺
しくて、うしろより詞をかけし故、馬を引返し候へば、其の人申し候
は、今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候。御人體を見

うけ、幸とこそ存じ候へ。御不祥ながら御相手になり申すべし。とて進みより候故、それこそなたも望む所にて候へ。とて互に馬を乗放し、既に槍をあはせんとしけるに、其の人、暫し御待ち候へ。今朝より雑兵を多く突き崩し候故、槍汚れて候まゝ、槍を洗ひ候うて、御相手になり候はん。とて、余吾の湖に槍を打ちひたし、二三遍洗ひつゝ、さらばとて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはてて、物のあやめも見えずなりぬ。其の時あなたより又詞をかけ、最早槍先も見えず候。御残多くは候へども是までにて候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す者にて候。とて、某が名をも承り候うて、此の後又陣頭にて出合ひ候はば、互に人手にはかゝり申すまじく候。もし又味方になりて候はば、わりなき入魂致し候べし。さらば。とて立ち分れしが、是程見

一伯殿
越前侯忠直
卿。
秀康の長子。

事なる武士は終に見侍らず。如何なりはて候にや。と語りけるに、其の頃伊勢が許へ、心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。其の日も來て勝手に居たりしが、此の物語をきゝて、勝手よりにじりいでつゝ、掃部に向ひて、さても只今の御物語承り、今更昔を思ひ、涙を落してこそ候へ。其の時の御相手になり候青木新兵衛は、はづかしながら我等にて候。かく申すばかりにては、うきたることに覺すべく候。とて、其の時雙方のよろひの緘、馬の毛色を一々いひけるが、一つもたがはざりければ、掃部驚きつゝ、さて久しくてあるひ候うて、本望に候。とて、手前にありし盃を方齋にさし、これをしるしにとて、腰のわきざしを抜きてひきけり。それより方齋が名、國にたかくなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にてめし出されけりとぞ。其の後一伯殿筑紫へ左遷の時、掃部は如

何なりけんか知らず。方齋は先祿にて加賀へ招かれ、それよりすぐ仕へて、子孫相續して今にあり。

翁加賀に在りし時、ある人此の事を語るを聞きしが、青木は武者ぶりの見事なるはさる事にて、阿閉が彼が事をいひ出て、名のり合ひてよろこびし、また伊勢が、子の鎧の着初に掃部を招きて、子の爲にとて武功の物語を望みし、何れもさしたる事にてはなけれども、其頃の士風武をたしなみし事知られ侍り。たゞ今、人家に子をそだて候に、食の喰ひぞめ、袴の着初などとして祝ひ候へども、鎧の着初と申す事は、大祿の家は存ぜず、我等如きのいやしき武士の家には承らず候。是も人々武の心懸うすき故にて候。よりて大小兩刀又は甲冑等のこしらへの華美を專にした。ただ武を道具と迄心得る體にて候。我が朝は武家の治世になりしより五百年以來、天下武

をもて風をなし候故、外の事はしらず、武の一筋は人々つねに忘れず。假初の一言にも臆したることをばいはず、しばらく立つにも脇差をはなさず、文道より見候はば、かたくなにいやしき方にてあるべく候へども、これほどに心懸けず候うては、武の一筋は通り申さず候。翁かねて學者に申し候は、學者の道に志すこと、武士の行住坐臥に武を忘れぬやうにさへ候はば、聖賢の域に至らん事も難かるべきに非ず。もとより武も義氣の發する所にて候。古來我が朝の武士を見るに、多くは不學にて、文道の僉議は疎く候へども、義にあたりては、一命を輕んじ、廉耻心を失はぬは、武義の致す所にて候。されば鎌倉以來、教化は世に行はれず候へども、せめて此の武義一つにて、士風をも維持し、國家も治平なる事に候へるに、近來はその武義さへかやうに衰へ行き候事は、所詮風俗の日に遊惰にな

り候故と、いとなげかしくこそおもひ侍れ。(禮集)

四 小宮山内膳

武田勝頼の臣小宮山内膳が節義こそ、最も感嘆するに餘あれ。内膳は勝頼近習の臣たりしが、天正年中の事にや、内膳人と争訟しける事ありつるに、勝頼讒人の言をもちひて、内膳が不直に決せしかば、内膳罪なくしてながく逐ひしりぞけらるゝ程に、是非なく家に蟄居して數月を経けるが、織田の兵甲州に亂入して、勝頼敗北し、故府をすてて、温井常陸介を先とし、わづかに四十二人の兵と天目山中に奔ると聞えしかば、内膳身をもて急に赴きしが、道にて追付きけり。さきの内膳と争ひし者、竝に讒せし者を問ひけるに、いづれもとく

にのがれ去りぬといへば、内膳慷慨してかたへの人にひけるは、「君我を用ひずしてすて給ふに、今出でて其の難に死せば、君の明を損ずるに似たり。又死せねば臣の義をやぶる。よし君の明を損ずるとも、臣の義をばやぶらじ」とて四十二人と同じく國難に殉ひけり。

此の難に、甲州の士皆勝頼を叛きて逃れ去りしに、四十二人ばかり、傾覆流離の間につき纏ひて、いさゝかも二心なく國難に殉ひしは、いづれも節義の士と申すべし。中にも内膳は、讒をもて冤枉にあひしをも怨みず、従者の列にもあらぬ蟄居の身として、外より來りて死に赴きし事、其の忠烈はるかに温井等が上にあるべし。

武田滅亡の後、東照宮内膳が忠義をふかく感じ給ひ、其の子なくして祭祀の絶ゆるを哀み給ひて、内膳が弟小宮山又七郎をめし出さ

東照宮
徳川家康。

れしが、其の後小田原陣の前、武職の人をきはめられしに、又七郎を以て御長柄鎗奉行に仰せ付けられける。その時内膳が勝頼に對して忠義ありし事をくはしく仰せたてられ、誠に武士の手本とおぼしめす。又七郎いまだ弱年なれども、兄内膳が忠義を感じ思し召すによりて、重き職を命ぜらるゝよし上意なんありけるとぞ。誠に死後の面目、忠義の驗と申すべし。(禮集)

五 乞食八兵衛

近世風俗衰へて、利欲にさかしけれども、人の性も主善説と善なる程に、族姓にもよらず、ならはしにもよらず、乞食體じきたいの者にも、はからざるに義理をしろの心あるぞかし。

享保癸卯の歲の十二月十七日、江戸室町むろまちの商人、越後屋吉兵衛きちべゑとい

我が國の年
十
享保癸卯
享保八年。
江戸室町
東京市日本橋
區室町。

ふ者の手代市十郎、諸方の買置の金請取りて歸りしが、金三拾兩入れたる袋ひとつ見えざる故、さだめて途にて落したるものにてあらん、もはやあるまじとはおもひながら、もと來し路を段々に尋ねありく程に、ある所に乞食一人ありしが、見とがめて、なにを尋ね候や。もし金を落されしには候はずや、といふを聞き、市十郎うれしくて、ありのままに語りければ、さればとよ、我等拾ひ置いて候。其の主のたづね來ぬ事はあらじと、それを待ちてこそ、さき程より此所にをるにて候へ。いよく、確なる事承りとゞけて、たがひなくば渡し候べし、といふ。市十郎、金の員數ゑんず、又は中にある證文などのやう、一々いひきかせしに、さては疑なし、とて取出し、袋のまゝにて渡しけり。市十郎餘りの事に、さてやみがたくて、内五兩取出し、是はせめてそこの得分とくぶんにせられよ、とて與へけれども、中々受くるけ

しきなし。市十郎いひけるは、此かねはなき物にきはめ置きしに、その志故にこそ、ふたゝび手にも入りたれ。然るを、残らず我が物とすべきにあらず。たつて受けてくれ候へ。といへば、よく考へて見給へ。其の五兩を貰ふ心得ならば、三拾兩を返し申すべきや。もとより自分の慾にてひろひ置きたるにてはなく候。定めておとしたる人、主人の金などならば、さぞ難儀に及ばるべし。他人に拾はせなば、其の落しし人にはふたゝび返るまじ。さらば我等拾ひ置きて、其の人に返さまく思ひて、拾ひ置きたるにてこそ候へ。そこ許へ渡し候へば、我等が志通りて候。さらばいとま申し候はん。とて、其の儘そこをさりて、見かへりもせで行きけるを、市十郎あつとを慕ひて、取りあへず懷中より金一星取出し、けふは寒氣もつよく候。歸られ候はば、是にて酒をもとめてたべられ候へ。とて與へ

ければ、是は御志にて候まゝ、申し受け候うて、是にて御酒たべ申すべし。とてそれをば受けて立ち別れける。名を尋ねければ、名は八兵衛とて、車善七が手下の乞食のよし申す。

市十郎宅に歸りて、主人吉兵衛にくはしく語りしかば、吉兵衛聞きて感涙にたへず、なにとぞ右の五兩を八兵衛につかはしたし。明朝早く善七が宅迄持参し、善七にも申しきかせ、八兵衛に合點いたさせ、とかく受け候やうにはからひ候へ。とて、市十郎に手代頭をさしそへつかはしける。さて善七がもとへ行きて尋ねければ、其の八兵衛と申し候乞食は、昨夕いづくにてやらん、金一切もらひ候とて、善七へも見せ候ひしが、なかまの乞食どもよびあつめ候うて、その金をもて酒肴もとめ、人にもたべさせ、其の身もたべ候ひしが、たべつけぬものを多くたべ候うて、食傷いたし候か、今曉急死いたし

候。といふを聞きて、市十郎驚き、死骸を見届け、善七に、此の死骸もらひたく候。かまへて粗忽に外へ移すべからず。と堅くいひ合せ、さて家に歸り、そのよしを吉兵衛にいひきかせければ、早々人をつかはし、死骸をうけ取り、右の五兩の金をもて、さる無縁寺にて厚く葬りしとなん。吉兵衛も義に感ずる事、商賈には奇特といふべし。おもふに、八兵衛たゞ人にあらず。いかなれば乞食の黨には入りにけん。定めてもとは賤しからぬ者にありしが、孤貧きはまりて、家もなく乞食してありし程に、外の乞食と一列になりて、是非なく善七が手下に屬しけるにもあらん。されば、ながらへて甲斐なき事とおもひしが、幸に金を得て酒肉をもとめ、火伴と歡會しける程に、これを限りとおもひて、自ら喉などしめて死しけるにもあらん。この八兵衛を士とし、又は人の上におくとも、權柄をもて人の物を

乞ひ求むるやうの事は、決してすまじき者なり。されば、世には名は歴々の士大夫とよばれて、實は乞食なる人もあり。この八兵衛は、名は乞食なれども、實は士大夫といふべし。(註)

二 鳩翁道話

三卷 柴田享の著。神儒佛の長所を取り入れて、心の修養を説きたる通俗談話なり。天保五年刊行す。

柴田享は鳩翁と號す。京都の人なり。盲となりて後常に諸方を巡遊し、専ら心學道話を講ぜり。天保十年五月六日歿。年五十七。

放心を求む

一

「人雞犬の放ること有れば、則ち之を求むることを知る。放心有れども求むることを知らず。學問の道は他なし。其の放心を求むるのみ。」これは孟子がたとへを以て御示しなされたのでござ

人雞犬の云々
孟子の告子章
句上にある言
葉。
孟子
孟軻。支那春
秋戰國時代の
人。孟子七篇
を著はす。

ります。雞犬とは犬にはとり、すべて飼猫あるひは雞など、いつも家へかへる時分にかへらぬとその飼主がうろくとたづねます。犬にとられはせなんだか、蛇にとられはせぬか、もしや人が盗



柴田鳩翁

んだかと向三軒兩隣迷子を尋ねるやうに、もし、こちらの三毛はこなたには居ませぬか。雞はまゐりませぬかと、尋ねあるくは人情でござります。

こゝが入用のところぢや、犬雞は紛失しても格別害には成りませぬ。心は身のあるじと申し、一身の旦那様ぢや。その心が物のために奪はれると、親の意見

も耳へ入らず、主人の教訓も空ふく風、蛙のつらに水かけた様に目ばかりばちくして、口にははいくと言うてゐれど、心こゝにあらざれば見れども見えず、聞けども聞えぬ、うまれもつかぬ片輪者の仲間入り、これはこれ、みな心の紛失してあるに依つてぢや。この心を尋ねようとも探さうともおもはず、親がわるい、主がわるい、夫がわるい、兄がわるいと、向へばかり目を附けて、我が身に立ちかへつて心を尋ねる事はせぬ。なんとむごい事ぢやござりませぬか。犬雞は尋ねても、肝心の心は尋ねぬ。よくうろたへたものでござります。

是ぢやに依つて聖人はこれを御歎きなされて、人の道ある事を御示しなされて下さる。この御示を承るを學問といふ。その學問の趣意は、此の心を尋ねさがすものでござります。かるが故に、學

問の道は他なし、其の放心を求むるのみと、仰せられました。のみとは盡きくして餘なきの辭。心を求むるの外、別に學問らしいものはないときつとおうけ合ひなされた御證文でござります。強ち唐やまとの故事來歴を知り、文字の穿鑿ばかりするを學問とは申しませぬ。兎角心のことぢや。八千餘卷の經論も、諸子百家の書物も、皆心のゆくへをしるした所書でござります。

この心を求むるとは、前以て申す我が身に立ちかへる事でござります。立ちかへる事をしらぬと、恐ろしいものぢや、どこまで往かうやら知れませぬ。又立ちかへると有難いものぢや、孝子にも忠臣にも立ちどころに成られます。善惡二つは、身に立ちかへるとかへらぬとの二つの境、道二つ、仁と不仁と、仰せられたも御尤でござります。是についておそろしい又有難い話がござります。

道二つ云々
孟子離婁章句
上に、「孔子
曰はく、道二
つ、仁と不仁
とのみ」と記
してある。

御眠からうが聞いておくれなされませ。

二

さる田舎に相應にくらす百姓がござりましたが、夫婦の中に男の子一人、何が可愛さのあまりに、牛が子をねぶる様に、愛だてなう育て上げられました。そこでその子が次第に横着者に成り、馬の尾を抜いたり、牛の鼻をくすべたり、近所の子たちをかりそめにもたいたり泣かせたり、わやくの中に成人して、たうとう手にあまる不孝者になりました。

親たちも詮方なう、其の身はめい／＼年は寄る、息子は次第にいきりをる、可愛いと、仕様がないとて、勘當も得せず、氣隨氣儘をさせておくと、いよ／＼圖に乗り、かしこでは投げたの、こゝでは腕をねち折つたのと、あら／＼しい大喧嘩、其の度毎に親達はいふに及ばず、

親類縁者の胸板に、釘うつ様な恐ろしい、悪黨者がござりました。

是はこれ、腹のうちからこのやうな、わんぱく者ではなけれども、おれが／＼が増長して、心を取失うたばかりで、このやうな難作者。なんと放心は恐ろしい事ぢやござりませぬか。勿論親類縁者から、親達へ勘當せいと、たび／＼催促はするけれども、何分一人子の事なり、今日は勘當あすは義絶と、口ではいへども、勘當もせず、徒に年月が経つて、かの横着者が二十六歳に成りました。

次第に悪行はつもの、後々は親類縁者へどのやうな難儀をかけようやら、怖氣が立つたもの故、一同に評定して、急に勘當をさつしやれぬと、親類中各方と義絶をいたさねば成りませぬ。あの息子をあのまゝにしておかれると、親類は申すに及ばず、村中へも、どんな難儀がかゝらうやらしれぬ。御夫婦には恨はなけれども、面々家

有無

老牛犢をねぶ
る。

後漢書楊彪傳
にある語。

が大事でござるによつて、義絶を願ひませうか、勘當をさつしやるか、有無の返事が聞きたい。』というてよこした。

其所で親達もせんかたつき、子故に親類義絶になつては、先祖へもすまぬ事、さらば今夜みな寄合をして下され、相談の上願書を認めませう。勿論親類中いづれ御連印下されねばならぬ。御苦勞ながら印形御持参にて、暮早々より御より下されい。』と返答せられた。古語に、老牛犢をねぶり、牝虎子をふくむ。』と、畜類でも鳥類でも身にかへて子を可愛がる。ましてや人として、其の子を勘當せにやならぬ様になつたら、さぞ悲しい事でござりませう。

さてかの野良息子は、この日近村で博奕をうつて居りました。折から村の友達が来て、今夜貴様を勘當すると親類が參會するげな、何んば貴様のやうな者でも、勘當せられたら定めて難儀をするで

團十郎
市川團十郎。
江戸の俳優に
して、荒事師
として著名で
あつた。

あらう。』と。半分聞かずに大聲舉げて、何ぢや、今夜おれが家で勘當の評定か。こいつ面白いことが出来てきた。全體親父や母者のほえづらが、この年ごろ見とむなうて、氣色が悪うてこたへられたものぢやない。勘當受けたら一本だち、唐へ飛ばうが天竺へ宿がへせうが、誰も點のうち人がない。このやうな有難い事はないぞ。さらば今夜評定の席へ乗りこんで、何でおれを勘當するのぢやと、一番團十郎をふんでゆすりかけたら、五十兩や七十兩の退代は巾着へ入れたやうなものぢや。其の金持つて京か大阪へ出て、食物屋でも始めたら面白い事であらう。どうぞ今夜首尾よう山のあたるやうに、前祝に一盃せう。』と同じ仲間の悪鬼たちと、茶わん酒の大酒宴、日の暮前に泥のやうに酔うたところで、さらばこの勢に家へいんで、一勝負はつて來うと大脇指をぼっこみ、我が居村へ歸つ

た時分は、丁度初夜まへ、大方今時分は、親類どもがより集り、ない智
 慧の底振うて、評定をして居るであらう、その所へ躍り込んで、大だ
 だけにだゞけたらば、百兩位はつかめるであらうと、既に我が家へ
 歸らうとしたが、きつと思案し、親類よつてゐる中へ、おれが顔を見
 せたらば、皆俯うつむいて居ゐるであらう、其の中で大聲あげるも何とや
 ら拍子がない。おれが事をあしざまにいうて居る其の圖にのり、
 躍り込まぬと座つきが悪い。こいつは一番思案をしかへて、裏の
 藪から座敷の縁先へまはり、一家の奴等が評定を立聞きしたら、定
 めておれがあくそもくそを店おろしするであらう。その拍子に
 戸障子蹴破り、大雷神と出かけたら、拍子があつて面白いと獨り思
 案し、雪駄を脱いで腰に挟み、尻引きからげて裏の藪から切戸きりどを越
 え縁先へ廻つて見れば、果して内にはひそくと、評定の最中、雨戸

人の親の云々
 藤原兼輔の
 歌。後撰和歌
 集の雜の部に
 ある。

のすきから覗いて見れば、親類縁者が車座に直り、めんく願書に
 判を押してゐる。

その願書が兩親の前へくると、かの息子がこれを見て、さあ此所が
 勝負ぢや、親父が判をしやるを相圖に、この戸を蹴破つて飛込まう
 と、居合腰に成つて息をつめてのぞいてゐる。なんと人も恐ろし
 い心になれば成るものではござりませぬか。

三

人の親の心は闇にあらねども

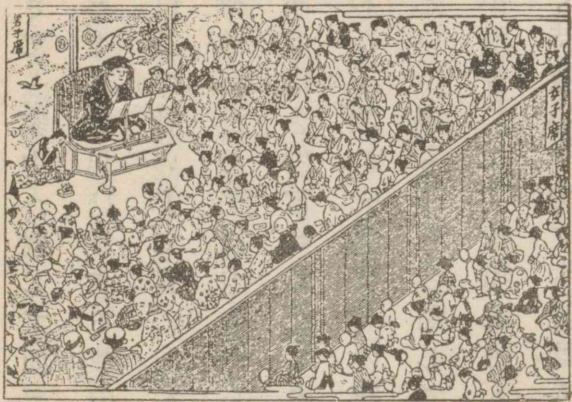
子を思ふ道にまどひぬるかな

さてかの親たち夫婦の前に勘當の願書が廻つてくると、母親は大
 聲を擧げて泣出す。父親は齒はもなき齒莖はをくひしばつて、さし俯
 いてゐらるゝ。やがてくもつた聲で、おばゞ印形を取つてござれ。

母親は返事も出でかね、泣く泣く、箆筒の抽出しから、革財布に入つた印形を、父親のまへに置くと、彼の野良息子は、雨戸の外から息をつめて窺うてゐる。

其のうちにごてくと財布の紐をとき、印形をとり出し、肉をつけて、既に判を押さうとする時、母親がその手にすがつて、先づ待つて下されといふ。父親は、此の期に及んで親類中が見てゐらるゝ、未練なことをいはいはしやるなといへども聞かず、まあわしが言ふ事を聞いて下され。尤もあの不孝者に此の家を譲つたら、三年たゝぬうちに草をはやすでござらう。それが悲しいというて、天にも地にもたつた一人の子を勘當したら、あとへかはりを貰はねばならぬ。其の貰うた養子が實體で、こちら夫婦に孝行をし、家も相續してくれ、ばよけれども、どうも確に養子は孝行なと定つた事もど

ざるまい。若しその養子が不心得で、家を野原にせうやらこちら



道 話 の 席

のやうな肩のわるい夫婦なれば、そのほども知れぬではござらぬか。同じ子故につぶす身代なら悴の爲に家を失ひ、なじんだ村を立退いて、夫婦袖乞になるとも我が子の尻からついて歩いたら、わしは本望に思ひます。五十年このかた、一生に一度の願、どうぞ聞き入れて勘當をやめて下され。子故に乞食をすると思へば、恨にも思ひませぬ」と、聲をあげて泣く泣くいはるゝ。

親類もこれを聞いて、一同に顔を見合せ、親父が何といはるゝぞと、

まもりつめて見ておれば、父親は何思ふたか、印形を財布へ入れ、手
ばやに財布の紐をしめて、かの願書を親類の前にさしもし、さて
さて一家中へ對して面目ない事のござれども、今ば、が言ふとこ
ろ、尤もに思ひまする故、向後悴は勘當は致しますまい。かういへ
ば其の甘い心で育てたもの故、あの様な不孝者が出来たと定めて
御前がたが笑はつしやうが、笑はれても苦しうござらぬ。勿論
あの悴を勘當せねば、この家が潰れる事は、物の三年待ちはすまい。
わが子故に、先祖代々の家を野原にするのは先祖へ對してすまぬ
といふ事も、能う合點して居ります。又勘當せねば、御前がたと
不附合になり、親類義絶も合點でござる。必定こちらが村を立退
く時、無心合力でも言はうかと、その用心の義絶であらうが、必ず案
じて下さるな。世間の義理も先祖への不孝も親類の義絶も顧み

ぬのは、子が可愛いばかり、その子の尻から乞食して、附いて歩く事
なれば、こちら夫婦が本望といふもの、決して御前がたへ無心合力
は言ひませぬ。はて何で死ぬるも一生ぢや。可愛い子のために、
大道にのたれ死に、並木のこやしになるのも、好んですれば恨とは
存ぜぬほどに、早々お前がたも内へ引取つて下され。明日から物
もいひませぬぞ。子故なら何と言はれてもかまひはござらぬと、
同じく大聲をあげて男なきに泣かるゝと、母親も勘當せぬと聞い
て、これも嬉泣に泣く。親類縁者はあまりの事に呆れ果てて、返答
もせず、たゞ夫婦の顔をうちながめて居るばかり。
なんと親の子に迷ふあはれなる心を御推察なさりませ。猫が子
をくはへあるくやうに、蔭になり日向になり、人のそしりも先祖へ
の義理も、我が身のつまらぬ行末もかまはゞこそ。子の可愛いに

とられ切つて、迷ひに迷うた親の心、實にあはれに氣のどくなものでござります。是がこれ、此の親達ばかりぢやない、世間に子を持つた親の心は、皆この通りでござります。

四

さて此の親の大慈大悲の光明が、かの不孝者の腸へしみわたると、有難いものぢや、さしも恐ろしい鬼のやうな横着者も、五體を木でしめらるゝやうに覚え、何といふ事は知らねども、胸さきへ涙が突っかけ、聲をあげて泣かれはせず、かます袖を口にくはへて、大地に倒れてしめ泣に泣いてゐる。圓位上人の歌に

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさになみだこぼるゝ

ようよんだ歌でござります。此の時の野良息子が、親をかたじ

圓位上人

西行法師。

俗名は佐藤義清、圓位と號す。

けないと思つたでもなく、又有難いと思つたでもない。何かは知らず、親の慈悲心が腸へこたへると、ようしたものぢや、立つても居てもゐられぬ。これが是、人々固有の本心と言つて、明かな徳を生れ附いてはゐれども、己が氣隨氣儘の身勝手に、しばらくその光をかくしてゐたのぢや。されども親の大慈大悲の光明で、腸を貫かれ、自然と息子の持前の光明がさそはれて耀き出すと、氣隨氣儘のむら雲はいづくへやら消失せて、眞實そこから親の慈悲が有難う成つて来る。

とくさ刈るそのはら山の木の間より

みがかれ出づる月のさやけさ

格別の悪黨ものが本心にたちかへると、一際すぐれてみがかれ出づる月のさやけさ。なんと有難いものではござりませぬか。

さてかの息子は、すぐさま座敷へかけこみ、親達へ詫言せんとは思
うたが、まてしばし、此のまゝかけこみたらば、親類縁者も驚き、いか
なる事を仕出すぞと、親達も御心つかひであらう、何知らぬ顔にて
表口から座敷へ出て親類について詫言せん、と一決して、忍び足に
裏より表へ廻り、わざと雪駄の音高く、咳拂と共に座敷へ通れば、親
類は大いに驚き、親達はにくい我が子の顔を見て夫婦とも泣いて
ござると、かの息子も何も言はずにさしうつぶいて泣いてゐる。
やゝありて親類中へ、さて是まで勘當々々と、度々聞きましたれど
も、さのみつらいとも存ぜんんだが今夜の寄合とうけたまはり、ど
うした事やらしきりに心細う覺えまする。何分これまでは重々
の不調法、此の上はきつと改めまするによつて、今夜の勘當しばら
く御用捨を下されい。永うとは申しますまい。わづか三十日の

日のべ、其のうちに性根が改らざば、其の時勘當しられても一言も
申分はござらぬ。どうぞ御前がたの御取りなして、親達が三十日
日延を致してくれらるるやう、御詫をなされて下されい。と、いつに
ない頭を疊へすりつけて頼む。此の時親類中は親達が手強い返
答に、その座しらけて立つにも立たれず、拍子のない折から、此の息
子が一言にこれ幸と一同に口を揃へ、今夜の所は待つてやつて下
され。と詫言する。親達は本心に立ちかへらいでさへ勘當はせぬ
心、まして今の一言を聞いて、唯嬉泣に泣いてゐらるゝ。親類もこ
れをしほに、随分孝行にさつしやれ。と言ひ捨てて其の夜の評定は
やみました。

これから彼の息子どのが、手の裏を返す様に孝行な人になり、ふた兩親
に仕へる有様、實に小兒の父母を慕ふが如く、これまでの悪行はあ

とかたもなく消失せました。此の事世間に取沙汰が高うなり、半年たゝぬうちに、御地頭様の御耳に入り、遂に御目がねを以て、大庄屋役をかの子に仰附けられました。是でかの子の孝行のしわざ、御推察なされませ。かくの如くその本心に立ちかへる事を放心をもとむると申します。(巻の下)

（以下は、本文の複製された文字がほとんど読めず、非常に淡く印刷されているため、正確な文字を抽出することは困難です。これは、複製された文章の再録部分と見られます。）

三 椿説弓張月

三十卷 瀧澤馬琴の著 源為朝の一生を綴れる小説 文化二年の刊行なり。

瀧澤馬琴名は解、江戸の小説家にして、南總里見八犬傳椿説弓張月の外著はす所三百二十餘種あり。嘉永元年歿、年八十二。



木綿山 豊後の國にある。

瀧 澤 馬 琴
山雄首を喪うて主を救ふ
重季軀を死して珠を全うす
爲朝は、ある日朝まだきより弓矢を携へ、山雄と呼べる一頭の狼を牽きて、木綿山に赴かんとし給へば、須藤重季主の袖を引きて、それ

いにしへの人云々

子曰く「暴虎馮河し、死して悔ゆること無き者は、吾奥にせざるなり。必ずや事に臨みて懼れ、謀を好みて成さん者なり。」(論語)

八代 紀平治の妻。

がし前夜夢見もあしく、覺めて後も何とやらん胸うち騒ぎて心持穩かならず。願はくはけふの山獵を止め給へかし」といひもをはらざるに、爲朝うち笑ひて、夢は五臟の勞に成るといへり。かゝることを諱まんは、婦人のうへにあるべし。汝心を安くして、よく留守せよ」と宣へば、重季又申すやう、いにしへの人も、事に臨みては懼れよといへり。されど止り給はじとならば、重季をも召俱し給へかし」としばく請うて已まざりし程に、かくまで思はば何か拒まん。われとともに來よ」と仰せて出で給へば、重季よろこびて松明に路をてらし、主の俱して立出でけり。さて爲朝主従は、木綿山の麓なる紀平治が家に立寄りて、彼をも伴ひ行くべしとて音なひ給へば、八代立出でて、まづ湯を進らせ、夫紀平治はこの曉に山へとて出でぬ。されど出でてより程もあらね

虎狼は云々
諺に曰く、狼子野心、是れ乃ち狼なり。其れ畜ふ可けんや。(左傳)

ば、追ひかけ給はば山の半腹にては追ひつき給はん」といふ。さらば急げとて、主従其處を走り去り、足に任せつゝ山ふかくわけ入り給ふに、いまだ夜もあけざれば、ゆくさき暗くして遂に紀平治を見ず。あまりに疾く走りて勞れ給ひしかば、古りたる楠の下に立寄り、主従株に尻をかけて明けはなるゝをまち給ふに、ひたすら睡をもよほして、もろともにまどろみ給ふに、やがて彼の山雄、一聲高く吼え、主の行藤のはしを銜へて引きにければ、爲朝も重季も、おどろき覺めて四方を見かへり給へど、眼に遮るものなし。こは山雄が戯るゝよとおぼして、又睡り給ふに、復いたく吼えかゝりて、嚼みもつくべき氣色なれば、爲朝きつとみそなはして、虎狼は狎れたりといへども畜ひがたしといふぞ宜なる。この畜生、わが睡れる間を窺ひて、啖はんとするにこそ。さもあらばあれ、目に物見せんとい

きまきて、刀の柄を握りもち、しばし睨みつめてぞおはしける。重季もこゝろ緩さず、すはといはば刺留めんと、鯉口くつろげてまもり居たるに、山雄はこの氣色にも怖れず、なほ吼ゆること二聲三聲、忽ち走りよらんとするを、重季跳りかゝりて丁と切れば、狼の首軀をはなれ、楠の梢に閃き上ると見えつるが、血しほさと滴りつゝ、頂の上より落つるものありて、大地にどうと響きしかば、主従ふたゝび驚き怪み、押明方の星の光に、眼を定めて見給へば、太さはこの楠の幹にも劣るまじく、長さいくばくとも量りがたき蟒蛇へびの喉笛へ、狼の首嚼みつきつ。蟒蛇はなほ半身は木にまつはりて蠢くを、主従刀を抜きもちて、刺しとほし刺しとほし、たやすくこれを殺し給ひしが、爲朝ふかく慚愧して、この蟒蛇が、梢よりわれを吞まんとしたればこそ、山雄がしばく、吼えかゝりて、裳を引きて知らせしな

れ。さるを、こは寇するかと一すぢに思ひ違へし愚さよ。彼、今重



山雄首を喪てう蟒蛇を嚙む

季が一刀に死すといへども、一念首にとゞまりて、主を救へるぞ殊勝なる。われ過てりく。と宣へば、重季はなほ面なくて、しきりに落涙に及びしが、しばらくしていへりけるは、それがし、ゆふべ夢見の悪しかりつるも、このことあるべき祥さむらいなりき。そも狼すら恩義を感じ身死して主の寇を殺す。われは獣にも及ばずして、年來かしづきまみらせながら、なほ君恩に報ゆるに至らず、却て山雄を殺しし事、恥ぢても恥づるにあまりあり。こは何

とせん。と悔いうらめば、爲朝はこれをなだめ、彼をあはれみて已み給はず。

この時夜もや、明けはなれ、連山見るく、雲起り、さしも今まで晴れたる空油然としてかき曇り、風さつと吹來る程こそあれ、時しも三月のはじめにてあれど、電光間なく閃き、雷さへおどろくしく鳴りわたり、直に頂のうへに落ちもかゝるべき有様なれば、爲朝しばし雲間をうちまもり、傳へ聞く、蛇數百年を経るときは、身の中にかならず珠あり。龍是をしることあれば、その珠を取らん爲に、まづ雷公を遣りて震はすとかや。思ふにこの蟒蛇には珠あるべし。重季試に裂きて見よ。と仰すれば、承りつ。といらへして、彼の蟒蛇の喉のあたりより、再び刀を突立て、これを裂かんとするに、雨は盆を覆へすがごとく降りながし、雷の鳴る事はますく烈し。爲朝は、

もし雷公落ちかゝる事もあらば、射とらんとて、弓に箭つがひ、少しその處を退きておはしけり。須藤は雨にひたと濡れつゝ、かゝる雷公をも物ともせず、既に尾のあたりまで裂きて見れど、これかと思ふ物もなし。もし珠は頭のかたにやあらんとて、刀をとりなほし、頭の皮を剥ぎて、腮の下を探り見るに、骨の間に物こそあれ。すは是ならんとよろこび、引出さんとする折しも、四方晦朦として、一朵の黒雲須藤が上に掩ひ累り、一聲の霹靂天地も動くばかりに鳴落つるを、爲朝よつ引いてひようと放つ矢少し手ごたへするやうなりしが、忽ちに雨止み、雲をさまりて、旭東の峯に昇れり。爲朝は重季が事いと心許なくて、晴るゝも待たず走りよりて見給ふに、哀れむべし、重季は、腦碎け、肉壞れ、全身黒くふすぼりて、肢體はつききたる所もなけれど、もてる刀さへ放さず、左手は血にまみれなが

蘭相如
支那戰國時代
趙の人。
嘗て秦王の許
に使用し、壁を
完うして歸つ
た。

ち、一つの珠を握り持ちて死したるが、雷公はこゝより昇りしかと見えて、十圍にも餘る楠を、斧もて割りしごとく、稍より根の際まで、二つに裂きてありしかど、爲朝はそれには眼もとゞめ給はず、ひたすら重季が横死を哀れみ、われ血氣の勇に誇り、求めて危きに臨むこと兩度に及び、前には過ちて山雄を殺させ、今又須藤を失へり。たとひ百朋の珠なりとも、一人の家の子に換ふべしや。殊さら彼はこの年來、憂にかしづきてまめやかなれば、思ふ程をも語らひて、心やりともなしたるに、夢見のあしとて諱みたるは、爰にて死なん祥なりき。さはいへ、日頃はかくばかり勇者とも覺えぬに、その身雷公に撃たるといへども、よくその珠を全うす。彼の蘭相如が忠にも勝れり。さて、よしなきわざをしつるかなと後悔ありて、心更にたのしみ給はず。かくて須藤が志をあだにせじとおぼしかへ

し、やがて彼の珠をとりて見給ふに、晃々として明月のごとく、世に類なき名珠なり。

かゝる處に、向ひの崖道より、いたく濡れて來るものありけり。誰ぞと見給へば、是八町礫の紀平治なり。彼も御曹司なりと見てければ、忙はしく走り來つ。須藤が雷死、山雄、蟒蛇の光景を見て大いに驚き、まづその故を問ひまゐらすれば、爲朝は愁然として涙を含み、一伍一什を物語り給ふにぞ、紀平治はますく驚きて、ふかく重季が死を哀れみ、又山雄の最期を惜しみつゝ、とかくして、楠の根を掘穿ちて、重季が屍を埋め、その傍へ山雄を埋めて、さて何をか標にせんといふに、爲朝手づから大いなる二つの石を、いと輕やかに持來給ひて墓標としつ。「亡魂生天、脱苦與樂」と念じつゝ、紀平治とも山を下り給ふ。

その夜、僧をむかへて經を讀ませ、須藤と山雄が爲に、ながく追善の佛事を修行し給ひけり。(前編卷の二)

四
川
柳



柳川代初

○ 賣家と唐様で書く三代目

大水は器物にはしたがはず(水け才圓の器に従ふ)

○ 居候三杯目にはそつと出し

武者一人叱られてゐる土用干

轉寢の顔へ一冊屋根にふき(轉寢の枕四五冊引抜かれ)

寢て居ても團扇のうごく親心

追剝とけの案山子まではぐにはか雨(不降りにつけて出て行く雨やどり)

(雨やどり来さうはむと見栄を言ひ)

初雪のたつた二尺は越後なり

すゝはきの顔を洗へば知つた人

佐野の馬と塚の坂で

二度轉び

「千客萬來」皆來ると困るなり

祭からもどると連れた子をくばり

新宅をほめる座頭はとげを立て

五 藩翰譜

十三卷。新井白石の著。關原役後延寶八年に至る八十年間に於ける萬石以上の諸侯三百三十七家の傳記沿革等を集録したるものなり。元祿十四年刊行す。



筆の其と石白

吾輩新井也。藩翰譜初序。傳人石借字一三。太玉宮精誠貫。日証彩白。巻讀は。徳志行。幕録。席留。録。因ら。慶。約。録。後。四。先。死。希。物。又。補。之。爲。邊。之。是。卷。以。區。中。等。十。二。段。人。其。莫。口。傳。格。之。許。其。此。解。泰。王。最。珍。查。使。子。素。翁。未。送。成。陽。爲。其。於。急。不。才。晚。秋。風。高。一。乃。水。重。り。人。不。願。半。身。小。昔。以。刊。石。白。徳。王。女。

新井白石名は君美。徳川家宣に仕へて輔翼の功多し。後致仕して専ら著述に勉む。享保十年五月九日歿。年六十九。

一 伊豆守信綱

左大臣家
徳川家光。

大殿
秀忠。

長四郎
信綱の幼名。

伊豆守信綱は、右衛門大夫正綱が子なり。慶長九年七月、左大臣家誕生ありし時、信綱わづか九歳にて、若君の御家人になさる。ある時、若君、大殿の御寢殿の屋の軒端に、雀の巢くひ、子生みたりしを、こなたより御覽じてほしがらせ給ひ、長四郎とりて參らせよ。とあり。長四郎年十一歳の時なれば、いかにも叶ふまじき由、辭しければ、晝は驚きて飛去ることもありなん。巢くひし所よく見置きて、日暮れてこなたの屋の軒の端さして登り、彼處に忍び行きて取るべし。おとなは、身重く、足音もしなん。たゞ汝取りて參らせよ。

將軍家
秀忠。

と、侍ふ人々の教へしかば、力なく、日暮れて、こなたの屋よりして、傳ひ傳ひ行く。既に御寢殿の軒に至りて取らんとせしに、踏損じて御坪の内へどうと落つ。將軍家御刀取つて、障子引きあけ給へば、御臺所、燈火取つて出でさせ給ひ、御覽ずるに、長四郎にてありけり。將軍家不思議に思し召されて、汝は、何しにこゝにけ來りぬるぞ。と御尋ありしに、今日の晝、この御殿の屋の軒端に、雀の子生みたるを遙に見て、あまりほしさに參りて候。と申す。將軍家、いや、おのれが心にはあらじ。誰が教へけるぞ。と、色々に推問あれども、幾度もはじめ申しし言葉に變らず。おのれ、事の由ありのまゝに申さず、争ひぬるこそ、年比にも似ぬ不敵なれ。と仰せられて、大きな袋の中におしいれて、口を御手づから封じ給ひ、柱にかけさせ給ひ、事の由、ありのまゝに申さざらんほどは、いつまでもかくて候へ。と仰

竹千代
家光の幼名。

せけれども、尙争ひ申すこと初の如し。夜既に明けて、常の御座を出でさせ給ふ。御臺所は、夙く心得させ給ひて、彼が幼き心にて、身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰なりと申さざる事を深く感じ給ひて、御手づから袋の縫目ほころばせ給ひ、女房達に仰せて朝餉召して、これたうべよ。とて賜はりて、又御手づから、もとの如くに縫はせ給ひておかせ給ふ。晝の程將軍家入らせ給ひ、又推問ありしかど、終に言葉をかへず。御臺所御詫言ありしかば、さらば向後の事を慎むべき由仰せて御ゆるしあり。將軍家、御臺所にむかはせ給ひて、彼が今の心にて生ひ立ちたらんには、竹千代殿の爲には、雙なき忠臣にて侍らんものぞ。と殊の外悦ばせ給ひきとなり。(第二)

二 本多重次

關白殿
豊臣秀吉。
德川殿
德川家康。
其の妹君
秀吉の妹、朝日姫。
大政所
秀吉の母。文祿二年薨。
岡崎の城
三河國岡崎市にあつた城。
康安中、徳川氏の祖松平康親の創始に係り、家康はこの城中で生れた。
井伊
井伊直政。徳川譜代の臣。
大久保
大久保忠教、通稱彦左衛門徳川譜代の臣。

關白殿いかにもして、徳川殿と親しうならんと、いろく謀をめぐらし、やがて又其の妹君を、徳川殿の北の方に參らせられしかば、徳川殿この上は見參なくては叶ふまじとて、御上洛あるべきに極る。御家人等が危く思はん所も侍る故、都に御逗留あらん程はそれに留めさせ給ふべしとて、大政所を下し給ひしかば、岡崎の城に入れまゐらせ重次これを守る。井伊大久保も同じく御後にとまる。

此の時重次下知して、大政所のおはしますほとりに、薪を積むこと山の如し。こはそも如何なる事ぞと驚き、大政所の御供せし女房達はした女して、薪つむ下部男一人まねき酒など吞ませ心よくとりて、さて何事にか、この程、日々にかく薪をば積む事ぞと問はしむれば、いかなる事とも下郎は知り申さず。たゞし承る所は、關白殿

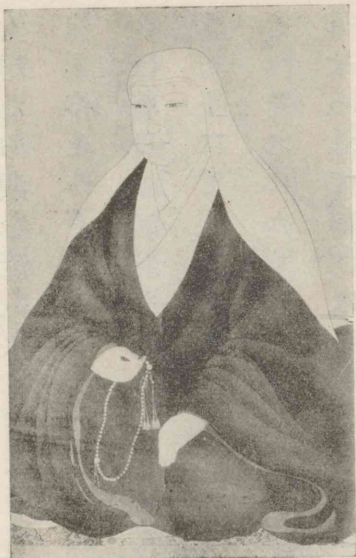
の我が國の殿を失ひ給ふか、若しくは留め參らせて返し給はずば、今度都より御下り有つて、是にまします御方を、盡く焼殺し申さん料の薪とかや申して、本多殿の下知として、日々に山林より切つて來り候が、この本多殿と申すは、極て氣の短き人にて、殿の御歸りおそし／＼と待ちかねて、今朝火を附けう、晩に焼きたてうとせられ候を、井伊殿や大久保殿が、しばし／＼と制し給へばこそ、今迄はかくて候へ。痛はしや、美しき都上藤の、今のうちにも、灰土にならせ給はん事の無慙さよと、下郎等は申す事にて候。と言ふ。

女房達打驚き、あな悲しや、その本多といふ男が、日々に參りて、恐れなる聲、音にて、家康より茲につけ參らせて候、御用の事あらば承りなんぞ。といふを、今思ひ合はすれば、三河守殿の初めて御參ありし時、仙千代丸といふ兒の御供したるを、殿下の御覽じて、あれは家

三河守殿
德川家康。
仙千代丸
本多重次の子

三奉行
高力清長・天
野清景・本多
重次を三河國
三奉行とい
つた。

康が内にて三奉行とか言ふうちの鬼作左衛門と言ふ者の子ぞ。と仰せありしかば、おそろし／＼鬼も子を生むにや、鬼の子は如何なる者にや。とて、物越に人々の見たりしに、其の親の鬼ならば、さこそ



大政所

はあらめ。さればこそ、これへ參る度毎に、家康かへり候はんとのことは、いまだ御沙汰も聞え候はぬや。とおととひもいひしぞ、けさもきのふもいひしぞ、待遠にや思ふらん。あはれ家康とくしてかへさせ給へかし。と泣きくどきて、この由を大政所へ申しけり。大政所も大いに驚き、なげき給ひて、日々に御消息ありて、德川殿をとくかへさせ給へ。こなたのありさまのいふせき、い

つゝの世にかは忘るべきなどありし事共こまゝと仰せ遣はされたり。ほどなく徳川殿御歸國ましまし、大政所歸りのぼらせ給ひければ、女房たち涙を流し、なさけなくも御母上を下したまひしものかな。鬼本多とかやが、とこそいうたれ、かくこそ計らうてさむらひつれ。今は朝日の姫君をまゐらせ給へば、徳川殿の御ためにも、大政所は御母上にて候を、如何に鬼なればとて、己が主の事しらぬ事や候べき。それにかく辛き目を見せ參らせて侍れば、はや徳川殿に仰せられて、如何なる罪にもあはせて、大政所の御恨みをも晴させ給へ。ととりふに訴ふ。關白殿笑はせ給ひて、家康はよき者共、あまた召し使ひけり。秀吉もその如き家人をば、ほしき事に候ふぞや。とばかり宣ひて、御座をたゝせたまひしとなり。(第四)

三 板倉重宗

周防守重宗は、勝重が嫡男なり。元和六年、三十五歳にて、父が薦に依つて京職に補せられ、職に在りしこと凡そ三十餘年、人の敬ふこと神明の如く、愛することまた父母に似たり。父も子も同じ名臣にて、君の寵恩尤も厚かりき。この人の職に在りし時の名譽、天下の稱する所擧げて數ふべからず。職に任じて後、日毎に決斷所に出づるに、西面の廊下にして、遙に拜することありて決斷所に至る。此處には茶磨一つを据置き、明障子を引立てて、その内に坐し、手づから茶ひきながら訴を聞分つ。人皆、この事どもを不審しあへり。されども問ふことも得ならず、遙か年経て後、問ふ人ありしに、答へて曰く、まづ決斷所に出づ

嫡男
後藤
三職
京都
奉行
警言察
裁判
訴訟

愛宕の神
京都の西北愛
宕山にある愛
宕神社。

る時に、西面の廊下にて拜することは、愛宕の神を拜するなり。多
くの神の中に、殊に愛宕は靈驗あらたなりと聞きしほどに、所願あ
りてかくは拜しぬ。その所願といふは、今日重宗が訴を斷らんに、
心に及ばんほどは、私の事あらじ、若し過ちて、私の事あらんには、立
ちどころに命を召され候へ。年頃深く頼み參らする上は、少しも
私心あらんには、世にながらへさせ給ふなど、日毎に祈誓するにて
候。また訴を判つことの明かならぬは、我が心の事に觸れて動く
が故なりと思ひ爲しぬ。よき人は、自ら動かさざらんやうこそあ
らめ、重宗それまでのことは叶ひ難く、たゞ我が心の動く静なる
とを試みるには、茶をひきて知る。心定まりて静なる時は、手もそ
れに應じて、磨の環ること平にして、きしられて落つる所の茶、いか
にも細かなり。茶の細かに落つる時に至りて、我が心も動かずと

知り、その後漸くに訴を判つ。また、明障子を隔てて訴を聞くこと
は、凡そ人の面貌をうち見るに、憎さげなると、憐がましきとあり、ま
た、かたましきあり、その品多くして、いくらといふ數を知らず。見
る所誠しと思ふ人のいふことは、誠と聞かれ、かたましきと見ゆる
人の爲す事は、何にても、皆いつはりで見ゆ。又、憐がましき人の訴
は、曲げられたる所あるよと思はれ、憎さげなる人の争は、僻事なら
んとおぼゆ。これ等の類は、我が目に見る所に心の移されて、彼が
言を出さぬうちに、はや我が心のうちに、邪ならん、正しからん、まが
らん、直からんと思ひ定むるほどに、訴の言葉を聽くに至りては、我
が思ふ方にその事聽きなすこと多し。訴のなるに及びては、あは
れがましきに、憎むべきあり、憎さげなるに、あはれなるあり、誠しき
に、偽りかたましきが多きこと、このたぐひ殊に多し。人の心の知

りがたき、容を以て定めんこと叶ふべからず。古の訴を聴くには色を以て聴くことあり。それは覆はるゝ所なき人のことなるべし。重宗が如きは、見る所について、心覆はるゝこと多し。又さなきだに訴の庭に臨んでは恐しかるべきに、まして生殺を掌る人を見ては、まばゆくいぶせて、おのづからいふべきことも得いはで、罪にも科にもあふ人あらんと思へば、所詮互に面を見も見られもせぬには若かじと思ひて、かくは座を隔つるにて候と答へきとなり。(卷五)

四 浅野長政

文祿の初、朝鮮の事起る。同二年六月、長政かの國に渡る。石田・増田等と相議し、諸軍勢を率ゐて、晋州城を攻め落す。

石田・増田
石田三成・増田長盛
晋州城
朝鮮慶尙南道にある。

今年の冬、太閤朝鮮の軍はかゝしからぬを怒つて、徳川殿を初め、宗徒の大名を名護屋の陣に集め、朝鮮の軍、今のやうならんには、いづ事定まるべしとも覺えず。今は秀吉みづから向はんと思ふ。

今年
文祿二年
名護屋
肥前國

利家・氏郷
前田利家・蒲生氏郷

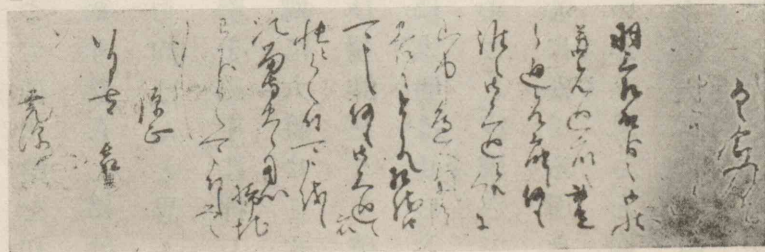


浅野長政

り。徳川殿御氣色損じて、利家・氏郷等に向ひ、日本の大名多き中、かたゝ二人選り出されて、一方の大將をたまはらんこと、弓矢取

三十萬の勢を三手に押しわけ、利家・氏郷に大將せさせ、三道より向ひ朝鮮をうち破り、まつすぐに大明にせめ入らん。本朝のこと、家康さてましませば、心にかゝる所なし。かたゝいかゞ思ふと仰あ

つての面目、何事かこれに過ぎん。抑家康苟も弓馬の家に生まれ、戦の中に年老いぬ。今この大事に及びて、いかで人々の跡にとゞまつて徒らに本朝を守り候ひなん。少勢には侍れども、家康も軍勢を率ゐて、必ず一方の先陣を承るべし。かたゞの御推舉を仰ぐ所に候と宣ひしに、彈正少弼長政進み出て、暫く候徳川殿。殿下この年月の御振舞、昔の御心とや思し召す。年經る狐の入り替つて候を、何事か宣ふべきと申しも果てぬに、太閤御佩刀に手をかけられ、やあ秀吉が心に狐の入り替つたるいはれ、きつと申せ。申し損じなば、しや首うち落してくれんず。



筆 政 長

と責めかけ責めかけ仰せけるに、彈正ちつとも騒がず、長政等が如きは、何百人が首刎ねられんにも、何條事か候べき。抑この年頃、よしなき軍起して、異國のみにあらず、本朝にも、父を討たせ、子を討たせ、兄弟を失ひ、夫に別れ、妻に離れ、歎き苦しむ者天下に滿つ。又それより、兵糧の轉漕、軍勢の賦役、六十餘州が内、悉く荒野となる。今日御參向あらんには、五畿七道の間、竊盜強盜等、蜂の如くに起つて、安き心も候まじ。徳川殿いかに思ひ給ふとも、いかでこれを防ぎて動きなく御跡を守り給ふこと叶ふべき。これ等のことを思ひてこそ、先陣とは宣ふらめ。されば、昔の御心ならんには、かほどの事など御心づきなかるべき。かゝる御心のつかせ給ふこと、これたゞ事にあらず。一定、狐の入り替つたるには候はずや。賤しき者の諺に、人とらんとする籠は、必ず人に捕らる。とは、この事にて候

ぞ。」と憚る所なく申しければ、太閤、籠にもせよ、狐にもせよ、おのが主と頼まんものに、雑言吐く條奇怪なり。」と、飛びかゝらんとし給ふを、利家氏郷押隔てて、人々御前に伺候せり。長政が首を刎ねられんに、御手を下さるゝまでも候はず。そこまかり申せ、彈正。」といはれて、長政はさらぬ體にもてなし、人々に色代して己が陣に歸り、御使を待つて腹切らんとす。重ねて仰せ出さる旨もなし。かゝる所に、肥後國に逆徒起りぬと早馬を參らす。太閤大いに驚き給ひ、徳川殿に御使あつて、長政具して御參りあれと仰せらる。やがて長政召し具せらる。太閤、肥後國に逆徒起りぬ。汝が嫡子左京大夫幸長、追討の使たるべし。」と仰せ下さる。長政大いに悦びぬ。(第七)

五 山内一豊

安土
近江國。天正
四年信長が城
を築いた所。

一豊、織田家に出て仕へし初、東國第一の名馬なりとて安土に引來りて商ふ者あり。織田殿の家人等これを見るに、誠に無雙の名馬なり。されども價あまりに貴くして、買ふべき人一人もなく、空しく引きて歸らんとす。



山内一豊の妻

その頃、一豊は猪右衛門尉と申ししが、この馬欲しと思へども、求むることいかにも叶ふべからず。家に歸りて、世の中に、身貧しきほど口をしきことはなし。一豊仕のはじめなり。かゝる馬に乗りて、見參に入りたらんには、屋形の御感にもあづかるべきものを。」と獨言いひしに、妻はつくづくと聞いて、その馬の價いかばかりにや。」と問ふ。黄金十兩と

こそいひつれ」と答ふ。妻、さほどに思ひ給はんには、その馬求め給へ。價をば、みづからまゐらすべし」とて、鏡の筥の底より黄金十兩取出しまゐらす。一豊大きに驚き、この年頃身貧しく、苦しきことのみ多き中には、この黄金ありとも知らせ給はず。いかに心強くは包み給ひけん。されども、今この馬得べしとは思ひもよらざりき」と、且は喜び、且は恨む。妻は、宣ふ所ことわりにこそ侍れ。さりながら、これは妾が父の、この家に参りし時に、この鏡の下に入れ給ひて、「あなかしこ、これよの常の事に用ふべからず。汝が夫の一大事あらん時に参らせよ」とて賜ひき。されば、家貧しく苦しむなどいふことは、よの常の習なり、これはいかに堪忍びても過ぎなまし。誠か、この度、都にて御馬揃あるべしなど聞ゆ。若しさもあらんには、天下の見物なり。君また仕の初なり。かゝる時ならでは、屋形

にも、朋輩にも見知られ給ふべきよしもなし。良き馬召して見参に入れ給へと思へばこそ参らすれ」といふ。一豊、やがてその馬求む。

程なく、都にて馬揃のありし時、織田殿この馬御覽あつて、大いに驚き給ひ、あつばれ名馬や。何者の馬ぞ」と仰せありしに、これは、東國第一の馬なりとて、商人が引いて参りしが、餘りに價貴くして、誰も買ふこと叶はず、空しく引いて歸るべかりしを、山内が買ひ得て候ひき」と申す。信長聞し召し、價貴き馬なり。當時天下に、信長が家ならで買ふべき人なしとて、奥より遙々來りしを、空しく還したらんには、無念の至なるべし。その山内は、年頃久しき浪人と聞く。家もさぞ貧しからんに、買ひ得たる事の神妙さよ、且は信長の家の恥をも雪ぎ、且は武士のたしなみいと深し」と感じ給ふこと大方

ならず。これより、次第に身を起せりといふ。(第七)

六 伊達政宗

景勝が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸りて、搦手より攻め入るべき由の仰せ承つて、大阪を打立ち、夜を日に繼ぎて馳下る。白河より白石に至つては、皆敵の中なれば道塞りぬ。常陸の國を廻りて、磐城相馬にさし懸つて國に歸らんとするに、相馬又累代の敵國なり。恙なく通らん事叶ふべからず。然るに政宗僅に五十騎ばかり引具して、常陸の國を経て、磐城と相馬との境に至つて、先づ相馬が許に使者を立て、この度徳川殿、上杉を征伐し給ふに因つて、政宗搦手より向ふべき由を承りぬ。一路次既に塞りて候ひし程に、東路に隨ひて、漸く此の境に至り侍りぬ。餘りに道を早

白河

磐城國。奥州に入る一門戸である。

白石

磐城國刈田郡にある町。

相馬

磐城國相馬郡。

長門守義胤

相馬盛胤の子。幼名孫二郎。長門守と稱した。

めて打ちし程に、士卒悉く勞れぬ。願くは城下に、旅館點じて給はらんには、馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず。と言はせたり。長門守義胤、是を聞いて、あつばれ運の盡さぬる奴原かな、ただにも、



伊達政宗

伊達は相馬が年頃の敵なり。ましてや、味方討たれん一方の大將承ると云ふ者を、いで今宵一夜討して、案内知らぬ者共を、此處彼處に追詰めて一人も残さず、討ち取つて、年來の仇報い、今度の賞に預らばや。とて、頓て民家をしつらうて迎ひ入れ、家子郎従等召集めて、夜討の様をぞ議したりける。爰に水谷三郎兵衛尉某、遙の末座より進み出て、末座の意見恐れ入つて候へども、既

に僉議の座に列つて候ふ上は、心に存ずる所を申さざらんは其の詮なし。抑、窮鳥懷に入る時は、獵者もこれを殺さずとこそ承れ。政宗ほどの大名が、既に年來の恨を棄て、君を頼みて來りしをたばかつて、闇々と討たれんは、勇者の本意とする處にあらず、長き弓矢の瑕瑾なり。又我が城を去つて、彼の國の境、駒が峯に到らんこと行程僅に三里、けふの日いまだ未の刻に下がらず。政宗おのれが境に到らんとだに思はゞ、日ゆふべならざる間に到りぬべし。それに僅の勢を以て、此所に止る事、豈深き謀計なからざらん。只同じくは、我が備を全うして、彼に代つて夜を守り、先づこの度は、本國に返し給ひ、重ねて戰に臨まん時、尋常に軍して、勝負を兩家の天運に任せらるべうもや候はん」と申しければ、滿坐の輩皆此の議に同じて、彼が旅館の邊に、糧料、魚鹽、秣、糠、藁に至るまで積み置きて夜に

入り四面に篝火たかせ、兵共に夜をめぐらせ、警衛心を盡してけり。義胤が士共も、政宗が餘りに取鎮めたる體を見て、憎し、いざ彼が振舞を試みんとて、夜更けて馬一二疋切つて放つ。雜人原走り散つて、以ての外に騒ぎ罵る。政宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打掛け、左の手に刀提げて立出で、相馬殿の御人や候ふ。御人や候ふ」と云ひし時、さむらふ」とて参りければ、物音高う候ふ、何事にや。政宗が雜人原、狼藉候はんには、能く鎮めてたべ」とて、又内にぞ入りにける。かくて夜明けけれども、立ちもやらす、巳の刻計りになつて、義胤が許に使用して一禮し、靜かに馬をうつて行く。竊かに人を付けて見せたるに、彼の國境の駒が峯のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く滿ちくゝて出で迎へぬ。

かくて關が原の合戰事終り、天下悉く平ぎて、相馬既に世帯を沒收

せられ、家亡ぶべきに極る。政宗徳川殿に訴へ申しけるは、相馬はたゞにも、政宗が年頃の敵なり。それに上杉、石田等に與みしたるが、一定に候はんには、政宗彼が爲に討たるべき時至つて候ひしに、君の仰せ承り馳せ下る由を聞いて、忽ちに舊き恨を忘れ、新しき恩を施して候ひき。是れ偏に彼が野心を挾まざりし故にあらずや。且は又累代弓矢の家、此の時に至つて、長く斷絶すべき事、誠に不便の至なり。たゞ然るべくは、彼が本領安堵の事、御免を蒙らばや」と、折に觸れて度々歎き奉りしかば、其の事となく、年月を経て後、本領をぞ賜ふたりける。(第八)

六 花月草紙

六卷。松平定信の著。作者の和文隨筆なり。松平定信は白川の城主松平定邦の嗣にして、天明七年老中となり、政経を擧ぐ。文政九年致仕して樂翁と稱す。夙に學を好み、兼ねて和歌及び畫に巧なり。



樂翁公自畫像

一 蝦夷のはなし

蝦夷の人に飯をあたへしかば、いとよろこびながら、そこら喰ひこぼしてけり。「やよ米はたまの緒つなぐものなるを、などかくおろそかにな

すか。』といへば、われらは米くひていのちをまたうするにはあらず。鮭さけといふ魚いそくひていくるを。』といふ。『さらば鮭の魚いそにてもいのちをばのぶるならば、それをばたふとぶべからん。いまその足にはきたるものは、鮭の皮ならずや。』といへば、暫時しばらくかしらかたぶけて、君のあしにつけたまふわらうづとやらんは、かの米のいでくる草にはあらずや。』といひしにぞ、あなどるまじきことよ。』と、人のいひしとぞ。

わが國の人はよその事を知らねば、蝦夷人のなりかたち、わが國の人とたがへば、いと愚にて、何知らぬものよと思ふたぐひぞおほき。それよりからくににてもあれ、えみじの人にもあれ、たゞすがたの見慣れぬをみては、腹かゝへ、ことばのわきがたきをききては、又わらふ。心せばくよそみぬ故なるべしといひぬ。

二 こがねを好む

いやしきものなりけるが、つねくふべきよねをもくはず、ひさぎてこがねにかへて、命にもかへじと袋にいれてもちゐたり。秋の末つかた、俄かに水出でにければ、かの袋をくびにかけて、高きところにゆかんとするに、はや水かさ高くて、行くべきやうなし。せんかたなく木によちのぼりてけるが、ことの外にうゑにのぞみけり。さるによねいさゝかつとし負うて、水およぐものをみて、かのふくろのこがねをみせて、これをみなまゐらせん。その負ふところのよねをいさゝかわけて給はれ。』といへば、いといかりて、憎にくきをこのいひざまかな。かゝるときこがねもちて、何にかはせん。』といひすて、およぎ行きしとなり。

三 晴雨を豫めいふ者

晴雨をよくあらかじめいふものありけり。「あすは雪ふらん」といふ。その日になれどふらず。「風はげしからん」といふ。その日になれどふかず。「いかにしつることよ」といへば、「こゝはふらねども、いづこかふりしなり。こゝはふかねども、いづこかふきしなり」といふ。きく人笑ふ。

のちにきけば、その日箱根の山は雪ふり、むさしののあたりは風いとはげしかりきとぞ。こゝの里の晴雨にたがへば、人の笑ひはまぬかれじ。さらばいはぬには如かじかし。

四 ねざめの床

寢覺の床
長野縣木曾谷
の名勝。

ねざめの里にゆきてみれば、あないのもの出でてきて、「この岩は獅子といふ。虎といふ。」など教ふるもうるさく、「いかでこはしゝなるべき。これもはたとらのかたちとはみえぬを。」などと、一つくゝいひ消たして行きぬ。そのかへさの道に名もなき岩のありしをふとみれば、よくもましろの腰かけしすがたに似たり。他の人に對ひてこの由いへば、「げに。」と人もいひけり。あとよりきたる人をまねきて、「ましろに似たる石あり。」とほこらしげにいひて、「これみ給へ。」といへば、「似たるところなし。」といひけり。



寢覺の床

あけのとし、かのねぎめの里へ行きてみしが、あないのものいひしことばは、や忘れてければ、これはとらのすがたなり。これはししの勢なり。」と見做しぬ。はじめは、「とらよ。しよよ。」ときよてみたらば似たるやうには思はざりしが。

五 鷹の羽にすむ虫

鷹の羽にすむ虫ありけり。「空たかくとびかけるときは、はるかに人の住家などをも見くだしつげに、我は事たれる身かな。つばさもうごかさで千里の遠きに行きかよひ、雲のよそまでもあがるめり。ことにさまぐの鳥はみなおそれてにげはしる。げにも我にかつものは大かたあらじ。」などおもひつゝ、かのたかの毛のうち居つゝ、しきりに、肉むらをさし、血をすひてゐしが、そのやから

いと多くなりもてゆきしにや、つひにそのたかもたふれにけり。それよりみづからいでて飛びかけらんとおもへども、飛び得ず。はしらんと思へども、すみやかならず。血もつき肉むらもかれぬれば、いまはいのちつなぐやうもなし。からうじてまづその毛のうちをくゞり出でてはひゆけば、すゞめの子のゐたりけり。我をおそれなんとみれば、すゞめの子はしらぬさまなり。いかにして見つけざるかとかたはらへはひよれば、うれしげにみて、くちばしさし、いだして、つゝいばまんとす。例なきことなればおそろしくてにげ隠れぬ。」との友だちにかたりにけり。

七 俳 句

季題

古池や蛙とびこむ水の音

芭蕉

一こゑの江に横たふや時鳥

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

(辭世) (此の世を去る時につくる詩)

夕立や家をめぐりて家鴨なく

其角

夕涼よくぞ男に生れける

順禮に打ちまじり行く歸雁かな

嵐雪

湖の水まさりけり五月雨

去來

芭蕉
松尾氏。伊賀
の人、元祿の
俳人、正風の
祖。

其角

榎木氏。江戸
の俳人、芭蕉
の高弟。

嵐雪

服部氏。江戸
の俳人、芭蕉
の門。

去來

向井氏。俳人
芭蕉の門。

野坡

竹田氏。越前
福井の俳人、
芭蕉の門。

凡兆

加賀金澤の俳
人、芭蕉の門。
蕪村

谷口氏。又與
謝氏と稱す。
天明の俳人。

士朗

井上氏。名古屋の俳人、晩
茶の門。

一茶

小林氏。信濃
の俳人、成美
の門。

夕涼あぶなき石にのぼりけり

野坡

長々と川一すぢや雪の原

凡兆

菜の花や月は東に日は西に

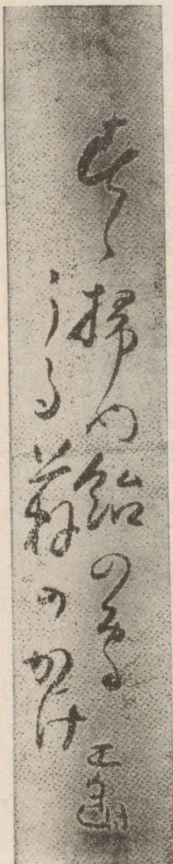
蕪村

山は暮れて野は黄昏の薄かな

皿をふむ鼠の音の寒さかな

たうくと瀧のおちこむ茂りかな

士朗



大根引大根で道ををしへけり

一茶

八 義經記

八卷。作者未詳。室町時代の作と稱せらる。源義經一代の傳記を記したる文學にして、幼時牛若と呼びし頃より、奥州下向の顛末、兄頼朝の軍を佐けて平家を亡したる後の漂流の義經を叙し、奥州衣川の自殺までを記す。

一 牛若鞍馬いりの事

常磐は子供の成人するに隨ひて、中々心ぐるしく、初めて人に従はせんもよしなし、習はねば、殿上にも交はるべくもなし、たゞ法師になして、跡をも弔ひてななど思ひて、鞍馬の別當、東光坊の阿闍梨は義朝の祈の師にておはしけるほどに、御使を遣はして仰せけるは、

常磐
牛若の母。

鞍馬
京都の北三里。

元祿十年版義經記

「義朝の末の子、牛若殿と申し候を、且は知しめしてこそ候らめ。平家世ざかりにて候に、女の身として持ちたるも心ぐるしく候へば、鞍馬へまゐらせ候べし。猛くとも、おだしき心もつけ、書の一巻を

頭殿
左馬頭義朝。

も讀ませ、經の一字をも覚えさせて給はり候へ」と申されければ、東光坊の御返事には、「故頭殿の君達にて渡らせ給ひ候こそ、殊に悦び入りて候へ」とて、山科へ、急ぎ御迎に人をぞ參らせける。七歳と申す二月初に、鞍馬へぞ上られける。

その後、晝は終日に、師の御坊の御前にて經を讀み書學して、夕日西

山
比叡山延曆寺。

多聞
多聞天王の略稱。毘沙門天に同じ。鞍馬寺の本尊である。

に傾けば、夜の更けゆくに、佛の御あかしの消ゆるまでは、共に物をよみ、五更の天にもなり、夜もほのくくと明くる迄、學問に心をのみぞ盡しける。東光坊にも、山三井寺にもこれ程の稚兒あるべしとも覺えず、學問の性と申し、心様眉目容貌類なくおはしければ、量智坊の阿闍梨、覺日坊の律師も、かくて二十ばかりまでも學問し給ひ候はば、鞍馬の東光坊より後も佛法の種をつぎ、多聞の御實にもなり給はんずる人」とぞ申されける。母もこれを聞き、牛若學問の性よく候とも、里に常にありなんどし候はば、心も不用になり、學問をも怠りなんず。戀しく見たしと申し候はば、わざと人を賜はり候うて、母はそれまで參り、見もし人に見えられて、返し候はんと申されけり。さなくとも、稚兒を里へ下す事、臚氣ならぬことなり。一年に一度、二年に一度も下さる。

ふるき郎等
義朝の乳母子鎌田正近、法名を正門坊といふもの。鞍馬に來り、牛若に謀叛を勧めた。

正門
前課にあつた舊き郎等といふのがこの人である。

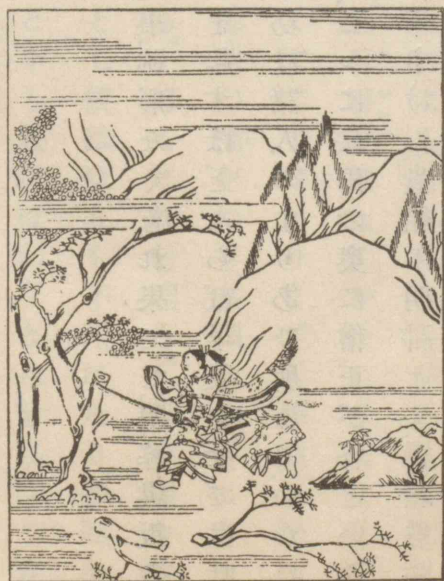
かゝる學問の性いみじき人の、いかなる天魔の勧めにやありけん、十五と申す秋の頃より、學問の心以ての外に變りけり。その故は、ふるき郎等の謀叛を勧むるにてぞありける。(卷第二)

二 牛若貴船詣の事

正門にあひ給ひて後は、學問の事跡形なく忘れ果てて、明暮謀叛の事をのみ思し召しけり。謀叛を起すほどならば早業をせては叶ふまじ、早業を習はんには、この坊は諸人のよりあひ所なり、いかに叶ひ難しと思ひ給ひけるに、こゝに鞍馬の奥に僧正が谷といふ所あり、昔はいかなる人の崇め奉りけん、貴船の明神とて、靈驗殊勝にわたらせ給ひけり。智恵ある上人も行ひて、鈴の聲も怠らず、神主もありて、御神樂の鼓の音も絶えず、あらたにわたらせ給ひしか

ども、世末未世になれば、佛の方便も神の驗徳も劣らせ給ひて、人住み荒し、偏に天狗の住所となりて、夕日西にかたぶけば、物怪喚き叫ぶ。

されば参りよる人も取りなやます間、参籠する人もなかりけり。されども、牛若かゝる所のある由を聞き給ひ、晝は學問し給ふ體にもてなし、夜は、日頃一所にてともかくも成り参らせんと申しつる大衆にも知ら



せずして、唯一人貴船の明神へ参り給ひ、掌を合せて念誦申させ給ひけるは、南無大慈の明神、八幡大菩薩、偏に源氏を守らせ給へ。宿願まこと成就あらば、玉の御寶殿造り、千町の所領を寄進し奉らん。

と祈請し、正面より未申ヒツコトに向ひて立ち給ふ。四方の草木をば平家の一類と名付け、大木一本ありけるを、清盛と名付け、太刀を抜きてさんくくに切り、かくて曉にもなれば、我が方に歸り、衣きよ引きかづきて伏し給ふ。

是を知らず、和泉と申す法師の、御介錯みやくご申しけるが、此の有様たゞ事にはあらじと思ひて、目を放さず。或夜御跡を慕ひて、かくれて草むらの蔭に忍びて見ければ、斯様にふるまひ給ふ間、急ぎ鞍馬に歸りて、東光坊に此の由申しければ、阿闍梨大きに驚き、量智坊の阿闍梨につげ、寺に觸れて、牛若殿の御髮みかみ剃り奉れとぞ申しける。量智坊此の事を聞き給ひ、幼き人も様にこそよれ。容顔世に超えておはすれば、今年の受戒痛はしくこそおはすれ。明年の春の頃、剃り参らせ給へと申しければ、誰も御名残さこそと思ひ候へども、斯様

に御心不用になりて御渡り候へば、我が爲、御身のため、然るべからず候。只剃り奉れ。とのたまひければ、牛若殿、何ともあれ、寄りて剃らんとする者をば突かんずるものを。と刀のつかに手をかけてお



はしましければ、左右なく寄りて剃るべしとも見えぬ。覺日坊の律師申されけるは、「これは諸國の寄合所にて靜ならぬ間、學問も御心に入らず候。某が所はかたはらにて候へば、御心靜に御學問候へかし」と申されければ、東光坊もさすがいたはしく思はれけん、さらばとて、覺日坊へ入れ奉り給ひけり。御名をばかへられ、遮那王

殿とぞ申しける。それより後には、貴船まうでも止まりぬ。日々
に多聞に日參して、謀叛の事をぞ祈られける。(卷第二)

三 辨慶洛中にて人の太刀を取りし事

辨慶思ひけるは、人の重寶は千そろへて持つぞ。奥州の秀衡は名馬千疋、鎧千領もつ。松浦の大夫は胡籙千腰、弓千張。斯様に重寶を揃へて持つに、我々はかほりのなければ、替へて持つべき様もなくし。詮ずる所、夜に入りて京中に佇みて、人の佩きたる太刀千振取つて我が重寶にせんと思ひ、夜なく、人の太刀を奪ひ取る。しばしこそありけれ、當時洛中に長一丈許ある天狗法師のありて、人の太刀を取る。とぞ申しける。

かくて今年も暮れければ、次の年の五月の末、六月の初までに、多く

秀衡
藤原氏。
松浦の大夫
肥前の松浦
家。

の太刀を取つたり。樋口烏丸の御堂の天井におく。數へ見たりければ、九百九十九腰こそ取りたりけれ。六月十七日五條の天神に参りて、夜と共に祈念申しけるは、今夜の御利生ごりせいに、よからん太刀を與へてたび給へ。と祈誓し夜更けければ、天神の御前に出で、南へ向つて行き、人の家の築土のきはたゞずみて、天神へ参る人の中に、よき太刀持ちたる人をぞ待ち居たる。曉方になりて堀河をくだりに行きければ、面白く笛の音こそ聞えけれ。辨慶是を聞きて、面白や、さ夜ふけて、天神へ参る人の吹く笛は、法師やらん男やらん、よからん太刀を持ちたらば取らんと思ひて、笛の音の近づきければ、さしくゝみて見れば、未だ若き人の、白き直垂に胸板を白くしたる腹巻に、黄金作の太刀の心も及ばぬをはかれたり。辨慶これを見て、あはれ太刀や、何ともあれ、取らんずるものと思ひて待つ所

御曹子
牛若。

に、後に聞けば、おそろしき人にてぞありける。辨慶はいかてか知るべき。御曹子は見給ひて、あたりに目をも放たれず。木のもとをよく見給へば、けしからぬ法師の太刀わきばさみて立ち居たり。彼奴はたゞものならず、このごろ都に人の太刀をうばひ取るものは、彼奴にてありと思はれて、少しもひるまずかゝり給ふ。辨慶、さしもけなげなる人の太刀をだにもうばひ取るに、まして是程なるやさ男、よりて乞はば、姿にも聲にも怖ぢて出さんずらん。實にくれずば、突倒しうばひ取らんと支度して、辨慶あらはれ出でて申しけるは、只今しづまりて敵を待つ所に、けしからぬ人の物の具して通り給ふこそ、怪しく存じ候へ。左右なくえこそ通すまじけれ。然らずば、其の太刀こなたへ賜はりて通られ候へ。と申しければ、御曹子是を聞き給ひて、此の程さるをこの者ありとは聞及びたり。

左右なく得こそ取らすまじけれ。ほしくばよりて取れ。とぞ仰せられける。其の太刀は、武藏坊是を見て、鬼神と抜見參に參らん。とて、太刀を抜いて飛んでかゝる。御曹子も小太刀を抜いて、築土のもとに走りより給ふ。武藏坊是を見て、鬼神ともいへ、當時我を相手にすべき者こそ覺えね。とて、もつて開いて丁と打つ。御曹子、彼奴はけなげ者かな。とて、電の如くに弓手の脇へつと入り給へば、打開く太刀にて、築土の腹に切先打立て、抜かんとしける隙に、御曹子走りよりて、弓手の足をさし出して、辨慶が胸をしたゝかに踏み給へば、持ちたる太刀をがらりと捨てたるを取つて、えいやといふ聲のうち、九尺ばかりありける築土に、ゆらりと飛上り給ふ。辨慶胸いたく踏まれぬ。鬼神に太刀とられたる心地して、呆れてぞ立つたりける。御曹子、これより後に、かゝる狼藉

すな。さるをこの者ありとかねて聞きつるぞ。太刀取りて行かんと思へども、ほしさに取りたりと思はんずる程に、取らするぞ。と



心許すまじきものを。と、つぶやきくぞ行きける。御曹子これを見給ひて、何ともあれ、彼奴は山法師にてぞあるらんと申し召しけ

穆王
支那周の穆王。
六韜
兵書の名。

れば、山法師人の器量に似ざりけり」と宣へども返事もせず、何ともあれ、築土よりおり給はん所を斬らんずるものと思ひて待ちか
けたり。築土よりゆらりと飛びおり給へば、辨慶太刀ふりてつと
寄る。九尺の築土よりおり給へりと覚えしが、三尺許おちつかで、
宙におはしけるが、又取つて返し、上にゆらりと飛上り給ふ。大國
の穆王は、六韜をよみ、八尺の壁を踏んで天にあがりしをこそ、上古
の不思議と思ひしに、末代といへども、九郎御曹子は、六韜を讀みて、
九尺の築土を一飛のうち宙より飛びかへり給ふ。辨慶は今宵
は空しく歸りけり。(卷第三)

四 頼朝義經に對面の事

兵衛佐
頼朝。

九郎御曹子、浮島が原に着き給ひ、兵衛佐殿の陣の前、三町ばかり引

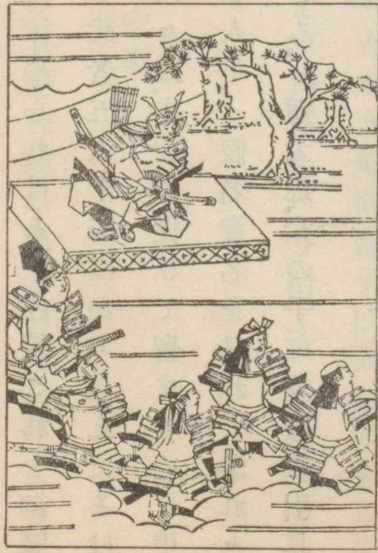
堀の彌太郎
親經。

退いて陣を取り、しばらく息をぞ休められける。佐殿これを御覽
じて、爰に白旗白印にて、清げなる武者五六十騎ばかり見えたるは
誰なるらん、覺束なし。信濃の人々は、木曾に従ひて留まりぬ。甲
斐の殿原は二陣なり。いかなる人ぞ。假名實名を尋ねて參れ。と
て、堀の彌太郎を御使にて遣はさる。彌太郎、家の子郎等數多引具
して參る。

間をへだてて、彌太郎一騎すゝみ出で申しけるは、こゝに白じるし
にておはしまし候は誰人にて渡らせ候ぞ。假名、實名を慥に承り
候へと、鎌倉殿のおほせにて候。と申しければ、其の中に二十四五ば
かりなる男の、色白く尋常なるが、黒き馬の太く逞しきに乗れり、歩ま
せ出でて申されけるは、鎌倉殿も知しめされて候。童名は牛若と
申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀叛の

佐藤三郎
繼信。

由承り、夜を日につぎて馳せ参じて候。見参に入れて給ひ候へ。と仰せられければ、堀の彌太郎、さては御兄弟にてまし〜けり、と馬より飛んで下り、御曹子の乳母子、佐藤三郎をよび出して色代あり。彌太郎一町ばかり馬を曳かせけり。かくて佐殿の御前に参り、此の由を申し上げければ、佐殿は善悪に騒がぬ人にておはしけるが、今度は殊の外嬉しげにて、さ



佐藤四郎
忠信。
伊勢の三郎
義盛。

らば、是へおはしまし候へ。見参せん。とのたまへば、彌太郎やがて参り、御曹子に此の由を申す。御曹子大きに悦び、急ぎ参り給ふ。佐藤三郎同四郎、伊勢の三郎、これら三騎召連れてぞ参らる。佐殿御陣と申すは、大幕百八十張ひきたりければ、そのうちは八箇國の大名、小名並み居たり。各敷皮にてぞありける。佐殿御座敷には、疊一疊しきたれども、佐殿も敷皮にぞおはしける。御曹子冑を脱ぎて童にもたせ、弓取りなほし、幕のきはに畏まりてぞおはしける。その時、佐殿敷皮をさり、我が身は疊にぞ直られける。「それへ〜。とぞ仰せらる。しばらく辭退して、敷皮にぞなほられける。佐殿は御曹子をつく〜と御覽じて、まづ涙にぞ咽ばれける。御曹子も共に涙にむせび給ふ。互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙をおさへて、さても頭殿におくれ

池の尼
清盛の繼母。
伊東北條
伊東祐親・北
條時政。

奉りて、その後、御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて、伊東北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひし程に、奥州へ御下向の由は幽に承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと思し召し忘れ候はて、取敢へず御上り候事、申し盡し難く悦び入り候。これ御覽候へ。かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を初として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申しあはする人もなし。皆平家に相従ひたる人々なれば、頼朝がよわげを守り給ふらんと思へば、夜もよもすがら平家の事のみ思ひ、又或時は、平家の討手上せばやと思へども、身は一人なり、頼朝自身すゝみ候はば、東國おぼつかなし。代官を上せんとすれば、心やすき兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、かへ

八幡殿
義家。
刑部丞
新羅三郎義
光。

つて東國をや攻めんと存ずる間、それも叶ひがたく、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が先祖八幡殿の後三年の合戦に、御弟刑部丞は、内裏に候ひけるが、俄に内裏を紛れ出で、奥州の覺束なきとて、二百餘騎にて下られけり。路次にて勢うちくははり、三千餘騎にて馳せ來て、八幡殿と一つになり、終に奥州をしたがへ給ひけり。その時の御心も、頼朝御邊を待ちえ參らせたるころにいかでかまさるべき。今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ、亡魂の憤を休めん。と宣ひもあへず涙を流し給ひけり。御曹子はとかくの返事もなくして、袂をぞ絞られける。これを見て大名小名たがひの心の中おしはかられて、みな袖をぞ濡されける。暫くありて、御曹子申されけるは、仰のごとく、幼少の時御目にかゝ

りて候ひけるやらん。配所へ御くだりの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へまゐり、十六までかたの如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつくる由承り候間、奥州に下向仕りて、秀衡をたのみ候ひつるが、御謀叛のよし承りて、取りあへず馳せまゐる。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見参に入り候心地してこそ候へ。命をば故頭殿に参らせ候。身をば君に参らする上は、いかゞ仰に従ひ参らせては候べき」と申しも敢へず、又涙をながし給ひけるこそ哀なれ。さてこそこの御曹子を大將軍にて上せ給ひけれ。（巻第四）

五 如意の渡にて義經を辨慶うち奉る事

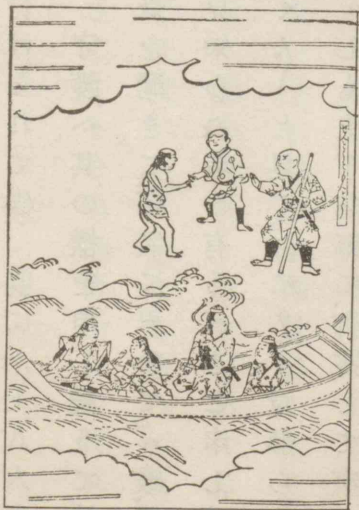
夜も明けければ、如意の渡を舟に召して、渡をせんとし給ふに、渡守

如意の渡
不詳。

羽黒
羽前國。

をば平權頭とぞ申しける。彼が申しけるは、暫く申すべき事候。これは越中の守護ちかき所にて候へば、豫て仰かうぶりて候ひし間、山伏五人三人はいふにおよばず、十人になれば、所へ仔細を申さで渡したらんは、僻事ぞと仰せ付けられて候。既に十七八人御渡り候へば、怪しく思ひ参らせ候。守護へ其の様を申し候うて渡し参らせんと申しければ、武藏坊是を聞きて、妬氣に思ひて、や殿、さりととも北陸道に、羽黒の讚岐坊を見知らぬ者や有るべき」と申しければ、中乗に乗りたる男、辨慶をつくつくと見て、げに、見参らせたるやうに候。一昨年、さをと、しも、上下向毎に、御幣とて申し下し給はりし御坊や」と申しければ、辨慶うれしさに、目よく見られたり、見られたり」とぞ申しける。權頭申しけるは、ござかしき男の云ひやうかな。見知り奉りたらば、わ男が計らひに渡し奉れ」と申し

ければ、辨慶これを聞きて、そもく此の中にこそ九郎判官よと名をさして宣へ。と申しければ、あの舳に、村千鳥の摺の衣めしたるこそあやしく思ひ奉れ。と申しければ、辨慶、あれは加賀の白山より連れたりし御坊なり。あの御坊ゆゑに、所々にて人々に怪めらるゝこそ詮なけれ。と云ひけれども、返事もせて、打ちうつぶきて居給ひたり。辨慶腹立ちたる姿になりて走りよりて、舟ばたを踏まへて、御腕をつかんで肩に引つけて、濱に走り上り、砂の上にながばと投捨て、腰なる扇ぬき出し、痛はしげもなく、續けうちに散々にぞ打ちたりける。見る人、目もあてられざりけり。平權頭



如意渡のり圖

六だうじな
この林
共に越中國射
水郡にある。

是を見て、すべて、羽黒の山伏ほど情なき者はなかりけり。判官にてはなしと仰せらるれば、さこそ候はんずるに、あれ程にいたはしく、情なく打ち給へるこそ心うけれ。詮ずる所、是は某が打ち參らせたる杖にてこそ候へ。かゝる御痛はしき事こそ候はね。是に召し候へ。とて、舟をさし寄す。

かくて、六だうじを越えて、なごの林をさして歩み給ひけり。武藏忘れんとすれども忘れず、走りよりて判官の御たもとに取付き、聲を立てて、泣くく申しけるは、いつまで君をかばひ參らせんとて、現在の主を打ち奉るぞ。冥見の恐もおそろしや。八幡大菩薩も免し給へ。あさましき世の中かな。とて、さしも猛き辨慶も伏し轉び泣きければ、侍ども一ところに並み居て、消え入るやうに泣き居たり。判官、是も人の爲ならず。か程まで果報つたなき義經

にかやうに心ざし深き面々の行末までもいかゞと思へば、涙のこぼるるぞ。とて、御袖をぬらし給ふ。各、此の御詞を聞きて、なほも袂を絞りけり。(卷第七)

六 衣川合戦の事



源義経
さる程に、寄手長崎大夫のすけを初として、三萬餘騎一手になりて押寄せたり。今日の討手はいかなるものぞ。秀衡が家の子、長崎の太郎大夫と申す。せめて泰衡

泰衡
秀衡の子。
父の遺言に反し、頼朝の言に動かされて遂に義経を討つた。

錦戸
國衡、泰衡の庶兄。

十郎權頭
兼房。

片岡
爲春。

鈴木兄弟

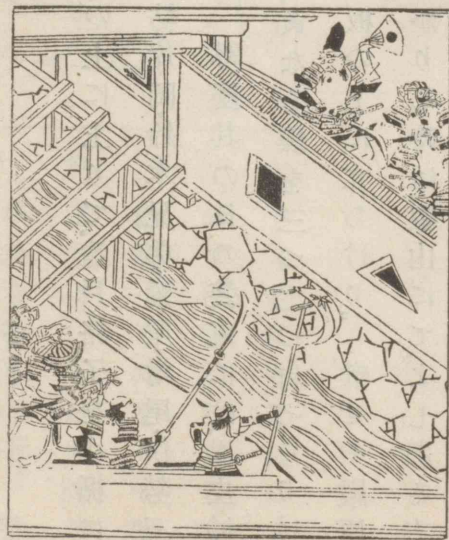
鈴木三郎重家
龜井六郎重清。

鷺尾
經春。

備前平四郎
房成。

錦戸などにもあらばこそ、最後の軍をもせめ。東の方の奴原が郎等に向ひて、弓を引き、矢を放さん事あるべからずとて、自害せんと宣ひけり。爰に十郎權頭喜三太二人は家の上に入りて、遣戸格子を小楯にして、散々に射る。大手には、武藏坊片岡鈴木兄弟、鷺尾増尾伊勢三郎、備前平四郎以上人々八騎なり。辨慶其の日の装束には、黒皮緘の鎧、裾金物平たく打つたるに、黄なる蝶を三つ二つ打つたりけるを着て、大薙刀の眞中握り、うち板の上に立ちけり。「嘩せや殿原達、東の方の奴原に物見せん。若かりし時は、叡山にて、よしある方には詩歌管絃の方にも許され、武勇の道には悪僧の名を取りき。一手舞うて、東の方の賤しき奴原に見せん」とて鈴木兄弟に嘩させて、うれしや瀧の水、鳴るは瀧の水、日は照るとも、絶えずとうたり、

東の奴原が鎧冑を首もろともに、衣川に切り流しつるかな。とぞ舞うたりける。寄手聞きて、判官殿の御内の人々程剛なる事はなし。寄手三萬騎に、城の内にわづか十騎ばかりにて、何程の立合せんとて舞まふらんとぞ申しける。寄手の者申しけるは、「いかに思し召し候とも三萬騎ぞかし。舞もおき給へ」と申せば、三萬も三萬によるべし。十騎も十騎によるぞ。己等が軍せんと企つる様のをかしければ笑ふぞ。叡山春日山の麓にて、五月會に競馬をするにすこしも違はず。をかしや鈴木、東の方の奴原に手なみの程を見せてくれ



圖の舞の慶辨

うぞ。とて、打物ぬきて、鈴木兄弟辨慶轡を竝べて、鉦を傾けて、太刀を冑の眞向にあてて、どつと喚きてかけたれば、秋風に木の葉の散るに異ならず、寄手の陣へ引退く。「口には似ざる者や。勢にこそよれ、不覺人どもかな。返せや返せや」と喚きけれども、返し合はする者もなし。

かゝりける所に、鈴木の三郎、てる日の太郎と組まんと、和君はたぞ。「御内の侍に、てる日の太郎高治さては重家が爲にはあはぬ敵なり。されども弓矢とる身は逢ふを敵。面白し、泰衡が内には、恥ある者ところそきけ。それが恥ある武士に、後を見する事やある。きたなしや、留まれ留まれ」といはれて、返し合はせ、右の肩を切られて引きのく。鈴木すでに弓手に二騎、馬手に三騎切伏せ、七八騎に手負はせて、我が身も痛手負ひ、龜井六郎犬死すな。重家は今はかうぞ。

と、これを最後の言葉にて、腹かき切つてふしにけり。「紀伊國藤代を出でし日より、命をば君に奉る。いま思はず一所にて死し候はんこそ嬉しく候へ。死出の山にては、かならず待ち給へ」とて鎧の草摺かなぐりすてて、音にも聞くらん、目にも見よ。鈴木の三郎が弟に龜井六郎、生年廿三、弓矢の手なみ、日頃人に知られたれども、東の方の奴原は未だ知らじ。始めて物見せん」といひはてず、大勢の中へわつて入り、弓手にあひつけ、馬手にせめつけ斬りけるに、面を向くるものぞなき。敵三騎打ちとり、六騎に手をおうせて、我が身も大事の疵數多おひければ、鎧の上帯おしくつろげ、腹かき切つて、兄のふしたる所に、同じ枕にふしにけり。さても武藏は、彼にうち合ひ此に打ちあひする程に、咽笛うちさかれ、血出づる事はかぎりなし。世の常の人などは、血醉などするぞ

かし。辨慶は血の出づればいとど血そばえして、人をも人とも思はず、倒るゝ様にては起上りく、河原を走り歩くに、面を向くる人ぞなき。



衣川合戦の圖

さる程に増尾の十郎も討死す。備前の平四郎も、敵あまた討ちとり、我が身も疵あまた負ひければ、自害して失せぬ。片岡と鷲尾一つになりて戦ひけるが、鷲尾は敵五騎打ち取りて死にたり。片岡、一方すきければ、武藏坊伊勢の三郎と一所にかゝる。伊勢の三郎敵六騎討取り、三騎に手負うせて、思ふやうに軍して深手おひければ、暇乞して、死出の山にて待つぞ。とて自害してんげり。

辨慶は敵逐拂ひて、君の御前に参りて、辨慶こそ参りて候へ。と申しければ、君は法華經の卷を遊ばしておはしましけるが、いかに。と宣へば、軍はかぎりに成つて候。備前鷲尾増尾鈴木兄弟伊勢の三郎各いくさ思ひのまゝに仕り、討死仕りて候。今は辨慶と片岡ばかりに成つて候。限にて候程に、君の御目に今一度かゝり候はんずる爲に参りて候。君御先立ち給ひ候はば、死出の山にて御待ち候へ。辨慶先立ち参らせ候はば、三途の河にて待ち参らせん。と申せば、判官、今一入名残の惜しきぞよ。死なば一所とこそ契りしに、我も諸共に打出でんとすれば、不足なる敵なり、辨慶を内に留めんとすれば、味方のおのゝ討死す。自害の所へ雑人を入れたらば弓矢の疵なるべし。今は力及ばず。假令我先立ちたりとも、死出の山にて待つべし、先立ちたらば、誠に三途の河にて待ち候へ。御經

も今少しなり。讀果つるほどは、死したりとも我を守護せよ。と仰せられければ、さん候。と申して簾を引上げ、君をつくづくと見まゐらせて、御名残惜しげに涙に咽びけるが、敵の近づく聲を聞き、御暇申して立ち出でんとして、又立ちかへり、かくぞ申し上げける。

六道のみちのちまたに待てよ君

後れさきだつならひありとも

かく忙はしき中にも、未來をかけて申しければ、御返歌に、

後の世もまた後の世もめぐりあへ

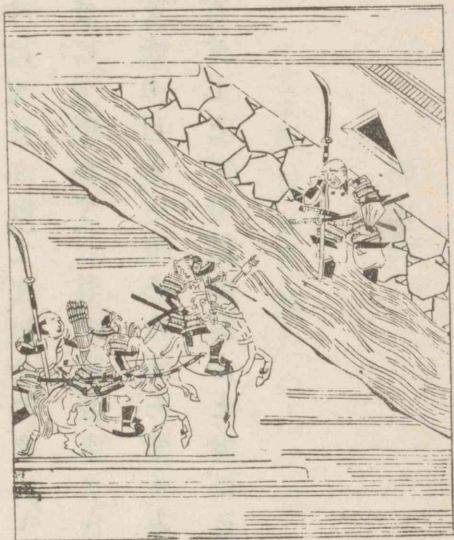
染むむらさきの雲のうへまで

と仰せられければ、聲を立ててぞ泣きにける。

さて片岡と二手にわけて驅けたりければ、二人にかけ立てられて、寄手の兵ども、むらめかして引退く。片岡七騎が中に走り入つて

戦ふほどに、肩も腕もこらへずして、疵多く負ひければ、叶はじとや思ひけん、腹かき切り失せにけり。辨慶今は一人なり。薙刀の柄一尺ばかりふみ折りて、かばとすて、あはれ中々よきものや。えせかた人の、足手にまぎれて悪しかりつるに。とて、きつと踏んばり立つて、敵いれば、よせあはせてはたと切り、ふつとは切り、馬の太腹前膝、ばらりくくと切りつけ、馬より落つる所は、長刀の先にて首をはね落し、峯にてたゞきおろしなどしてくるふほどに、一人に切立てられて、面を向くる者ぞなき。鎧に矢の立つ事敷をしらず。折りかけくしたりければ、蓑をさかさまに着たるやうにぞありける。黒羽・白羽染羽いろくの矢ども、風に吹かれて見えければ、武藏野の尾花の、秋風に吹きなびくに異ならず。八方を走りまはりて狂ひけるを、寄手の者ども申しけるは、敵も味方も討死すれども、辨慶

力士
金剛力士。



辨慶立往生の圖

ばかり、いかに狂へども死なぬは不思議なり。音に聞えしにも勝りたり。我が手にこそかけずとも、鎮守大明神たちよりて蹴殺し給へ。と呪ひけるこそをこがましけれ。武藏は敵を打拂ひて、薙刀を逆様に杖につきて、仁王立ちに立ちにけり。偏に力士の如くなり。一口笑ひて立ちたれば、あれ見給へ、あの法師我らを討たんとて、此方を守らへ、しれ笑ひしてあるは、たゞ事ならず、近くよりて討たるな。とて、左右なく近づく者もなし。さる者の申しけるは、剛の者は立ちながら死する事ありといふぞ。殿原當りて見給へ。と申

しければ、我當らん、といふ者もなし。ある武者、馬にて邊を馳せければ、疾くより死にたる者なれば、馬に當りて倒れけり。薙刀を握り、すくみてあれば、倒れ様に先へうちこすやうに見えければ、すはすは又狂ふは、とて、馳せのきく控へたり。されども倒れたるままたにて動かず。其の時、我もくくとよりけるこそ、をこがましく見えたりけれ。立ちながらすくみたる事は、君の御自害のほど人を寄せじとて守護の爲かとおぼえて、人々いよく感じけり。(卷第八)

九 狂言

梯山伏

シテ(次第)「貝をも持たぬ山伏が、く、道々うそをふかうよ。」

これは出羽の羽黒山より出てたる駆出の山伏です。此の度大峰葛城をしまひ、只今本國へ罷り下る。まづ急いで參らう。誠に行は萬行あるとは申せども、取分け山伏の行は、野に伏し、山に伏し、難行苦行を致す。其の奇特には、空飛ぶ鳥をも眼の前へ祈り落すが山伏の行力です。これは如何な事、今朝宿を早々立つたれば、殊の外物欲しうなつたが、あたりには在所は無きか知らぬ。いや、これに見事な梯がある。これをうち落いてたべう。やつとなく、なか

大峰・葛城
共に大和國に
ある。

なか届くことでは無い。いや礫を打たう。これに幸ひ手ごろな石がある。これを打たう。やつとなく、なかくそばへも行かぬ。何としたものであらうぞ。いやこれに登つて喰へと云はぬばかりの好い登所がある。こりへ上つてたべう。やつとな。はあ、下で見たと違うて格別見事な。これはどれに致さうぞ。いやこれがよささうな。これに致さう。さてもく旨い柿かな。此のやうな旨い柿はつひに食うた事はござらぬ。今度はどれに致さうぞ。これが見事な。さりながら、これはちと澁さうなが、まづたべて見よう。さればこそ澁い。(と云うて種を吹散らす)ア、これは此の邊に住ひ致す者でござる。某樹木を數多持つてござるが、當年は柿が大なり致いてござる。柿と申す物は、えて人の取りたがるものでござる程に、見舞に參らうと存ずる。まづそ

ろりくと參らう。誠に當年のやうに大なり致いたことはござらぬ。人ばかりでもござらず、鳶鳥もつきたがる程に、油斷のならぬこととてござる。(廻り掛り柿の實頭にあたる)はて合點の行かぬ事ぢや。これはいかな事、柿の木へいかめな山伏が登つて柿を食ふ。何としてやらうぞ。いやく、山伏をあら立つれば、却つて仇をなすと申す程に、散々になぶつてかへさうと存ずる。やあ、あの柿の木の陰へ隠れたを人かと思へば鳥ぢや。シテ「はあ、鳥ぢや」と云ふ。ア、鳥といふものは啼くものぢやが、おのれ啼かぬか。啼かずば、人であらう。弓矢をおこせ。射殺して遣らう。シテ「啼かずばなるまい。こかあ、ア、さればこそ啼いた。さてよく見れば、あれは、鳥ではない、猿ぢや。シテ「又猿ぢやといふ。ア、猿といふものは身せせりをして啼くものぢや。啼かぬか、啼かずば、人であらう。鐵砲を

持つてこい。打殺いてやらう。シテ身ぜせりをして啼かざばなるまい。きやあ〜〜。アド「さればこそ啼いた。さて〜彼奴は物真似の上手な奴でござる。今度はちと彼奴が困ることがありさうなものぢやが、それ〜、あれをよく〜見れば、猿でも鳥でもない、鳶ぢや、シテ又鳶ぢやと云ふ。アド「鳶といふものは、羽をのして鳴くものぢやが、おのれ鳴かぬか。鳴かざば人であらう。一矢に射殺いてくれう。シテ羽をのして鳴かざばなるまい。ひいよろ〜ひいよろ。アド「さればこそ鳴いた。最前から間もある程に、最早飛びさうなものぢやが、シテこれは如何な事、飛ばずばなるまい。アド「はあ、飛ぶぞよ。シテ「ひい。アド「飛びさうな。シテ「ひい〜ひいよろ。ひいよろ〜。アド「よいなりの、急いで罷り歸らう。シテ「やい〜、其處なやつ。

役の行者
役小角。奈良
時代の人で、
本朝修験道の
祖。

アド「やあ。シテ「やあとはおのれ憎いやつの。最前から此の尊い山伏を、鳥類畜類に譬ふるのみならず、剩へ鳶ぢやといふ。總じて山伏の果は鳶になると云ふに依つて、身共も鳶になつたかと思つて、あの高い處から飛んだれば、まだうぶ毛も生えぬものを飛ばせをつて、腰の骨をしたゝかに打たせをつた。さあ〜、汝が宿へ連れて行つて看病をせい。アド「やいおのれ憎いやつ。柿を盗んで食ふ山伏を誰が看病するものぢや。シテ「其のつれな事を云ふならば、爲に悪からうぞよ。アド「爲に悪からうと云うて何とする。シテ「目に物を見せう。アド「それはたれが。シテ「身共が。アド「そちが分として目に物を見せたりとも、深いことはあるまいぞ。シテ「ていどさう云ふか。アド「おんでもないこと。シテ「おのれ、悔まうぞよ。アド「何の悔まう。シテ「たつた今、目に物を見せう。それ山伏といつば、役の行者のあ

河津の三郎
祐泰。

曾我太郎
祐信。

そもく伊豆の國赤澤山の麓にて、工藤左衛門尉祐經に討たれし河津の三郎が子二人あり。兄をば一萬といひて、五つになり、弟を箱王といひて、三つにぞなりにける。父に後れて後、何れも母につき、繼父曾我太郎が許にて育ちけり。やうく成人する程に、父が事を忘れずして歎きけるこそ無慙なれ。人の語れば兄も知り、兄が語れば弟も知り、戀しさのみに明け暮れて、積るは月日ばかりなり。心のつくに従ひて、いよく忘るゝ隙もなし。われら二十になり、父を討ちけん左衛門尉とやらんを討取りて、母の御心をも慰め、父の孝養にも奉ぜんと、忙はしきは月日なり。數ならぬ身にも日數の積ればにや、憂き事どもに長らへ來て、一萬九つ、箱王七つにぞなりにける。折節九月十三夜の、まことに名ある月ながら、隈なき影に、兄弟庭に出でて遊びけるが、五つ連れたる雁がねの、西に飛

びけるを一萬が見て、あれ御覽ぜよや箱王殿、雲居の雁の何處を指して飛行くやらん。一つらも離れぬなかの羨しさよ。弟きゝて、何かはさ程羨むべき。我等が伴ふ者どもも、遊べば俱に打連れて、



歸ればつれて歸るなり。兄聞きて、さには非ず。何れも同じ鳥ならば、鴨をも鷺をもつれよかし。空を飛べどもおのれくが友ばかりなる事ぞとよ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもは父ならず。戀しと思ふその人の、行方も敵のわざぞかし。箱王

犬追物・笠懸
共に騎射の
名。

聞き、親の敵とやらんの頸の骨は、石金よりも堅きものか。と問へば、兄が聞きて、袖にて弟が口を抑へ、かしがまし、人やきくらん。聲たかし。隠す事ぞ。といへば、箱王聞きて、射殺すとも首斬るとも、隠して叶ふべき事か。さはなきぞとよ。それまでも忍ぶ習ぞかし。心へのみ思ひて、上にはものを習へとよ。能は稽古によるなるぞ。我等が父は弓の上手にて、鹿をも鳥をも射給ひけるなるぞ。あれ父だにましまさば、馬をも鞍をも用意して賜ひなまし。さあらば犬追物・笠懸をも射習ひなん。我等より幼き者も世にあれば馬に乗り物射る見るも羨し。と口説きければ、箱王聞きて、父だにましまさば、みづからが弓の弦くひ切りたる鼠の首は、射させ參らすべきものを、腹立ちや。といへば、兄が聞きて、それよりも憎きものこそあれ。誰なるらん、自らが乗りつる竹馬うち候ひつる事か。その

伊東殿
伊東祐親。
君
頼朝。

事にてはなきぞ。父を討ちける者の憎さに、月日の遅き。といへば、習はずとても、弓矢とる身は弓射ぬ事や候べき。兄が聞きて打笑ひ、和殿さやうにいふとも、手馴れずしては如何あるべき。射て見よ。とて竹の小弓に篋は薄なる笹作の矢さしつがひ、兄障子を彼方此方に射通し、何時か我等十五十三になり、父の敵にゆき逢ひ、かやうに心の儘に射通さん。箱王聞きて、さる事にては候へども、大事の敵、弓にては如何と覺えたり。かやうに首を斬らん。とて、障子の紙を切り、高々とさし上げ、側なる木太刀を取りなほし、二つ三つに切つて捨てて、立ちたる眼ざし、人に變りてぞ見えたりける。(卷第三)

二 母なげきし事

さても、祐信彼等が母に申しけるは、故伊東殿、君の御敵にてうせ給

ひしその孫とて、二人の幼き者どもをまゐらせよとの御使に、梶原殿の來れり」といひければ、母は聞きもあへず、心憂や、是は何となり行く世の中ぞや。夢とも現とも覺えず。實に夢ならば覺むる現もありなまし。憂き身の上の悲しきも、彼等二人を持ちてこそ、萬の憂も慰みつれ。身の衰ふるをば知らて、何時か成人して大人しくもなりなんと、月日の如く頼もしく、後の世かけて思ひしに、斬られ參らせてその後、憂き身は何とながらへん。たゞ諸共に具足して、とにもかくにもなし給へ」と泣悲しむ其の聲は、門の邊まで聞えけり。實にや園生そのふに植ゑし紅の、焦るゝ色のあらはれて、他所に見えしぞ哀なる。絶えぬ思の餘にや、母は子どもを左右の膝に据置き、髪かき撫でて口説きけるは、祖父おぢ伊東殿君に情なくあたり奉りし故に、その孫とて汝等を召さるゝぞや。如何なる罪の報にて、人

こそ多けれ、御敵とはなりぬらん、心憂さよ。さりながら、汝等が先祖、當國に於て誰にかは劣るべき。知らぬ人あるべからず。君の御前なりとも、恐るゝことなく、最期の所にていひがひなくして叶ふまじ。さしも勇みし親祖父の世にありし故にこそ、御敵ともなり給ひしか。幼くとも、思ひ切りて臆する色あるべからず。健氣に、と申せども、涙にこそ咽びけれ。實にや叶はぬ事なれども、汝等を留めおき、その代りに妾出でて、いかにもなりなば、心安かりなると泣きければ、二人の子どもは、聞分けたる事はなけれども、唯泣くより外の事ぞなき。

時移りければ、景季使を以て母の方へ申しけるは、御名残ことわりと存じ候へども、御思は盡くべきにあらず、疾く疾く」と責めければ、祐信「承り候」とて、嬉しからざる出立を急ぎけり。母も今を限りの

事なれば、介錯するぞ哀なる。やがて歸る途だにも、さしあたりたる別は悲しきに、歸らん事は不定なり、見見えん事も今ばかりぞと思へば、氣も魂も身にそはず。一萬おとなしやかに、あまりな御歎き候ひそ。御思を見奉れば、冥途安かるべしとも覺えず。若し斬られまゐらせば、前世の事と思し召せ、といひければ、箱王、兄の仰せらるゝ如く、な御歎き候ひそ。我々手を出して御敵仕る身にてもなし。その上未だ幼く候へば、御許もや候べき。佛にも御申し候へ。と誠にげに、しく申すにつけても、いよく名残ぞ惜しかりける。さりともと思へども、正しき御敵なり、歸らん事は不定なり。留まり居て物思はんことも悲しければ、一所にて如何にもならんと出立ちけるぞ哀なる。祐信これを見て、さりとも斬らるゝまではあるまじ。誰々もよきやうに申し給はば、いかさま遠き國に流

しおかれぬと覺えたり。左様なりとも、命だにあらば、と慰めおきて、二人の子どもを誘ひ出でける心の中こそ哀なれ。(卷第三)

三 箱王箱根へ上る事

母、弟の箱王を呼寄せて宣ひけるは、和殿は箱根の別當の許へ行き、法師になり、學問して親の後世弔へ。ゆめく男羨しく思ふべからず。世を遁るゝ身なれば、綾羅錦繡の袖も苔の衣に同じ。十善帝王も身を捨て、人に對するに所なし。憂きも辛きも世の中は、夢ぞと思ひ定むべし。傳へ聞く、大目連尊者は、母の教へ給ひし御言葉、を、耳の底に保ち給ひてこそ、五百の大阿羅漢には超え給ひしぞかし。構へて、法師となりて、父の跡をも妾が後世をも助け給へ。と申されければ、箱王身に思ふことありと思ひけれども、承り候。とぞ

大目連尊者
釋迦の高弟。

いひける。母悦びて、生年十一歳より箱根に上せ、年月を送りける程に、箱王十三にぞなりにける。十二月下旬の頃、かの坊の稚兒同宿二十餘人ありける者共の許へ、親、親しき方より面々に音信どもありけるに、下れと書きたる文もあり、或は元三わんさんの装束に、師の御坊への贈物添へたる文もあり、或は父の文、母の文、叔父叔母の文とて、二つ三つ讀む稚兒もあり、五つ六つ讀む稚兒もありけり。中にも箱王は、唯母の文ばかりに、からく、装束添へて送られけり。よろづ羨ましくて、文を袂に引入れ、傍に行き、泣萎れて、或稚兒に逢うていひけるは、人は皆父母の文、親しき方の御文とて、數多讀み給ふに、我は唯母の御文ばかりにて、父とやらんの御文は知らず、何と書かれたるものぞや、見せ給へ。十郎殿と二宮殿とは、何とやらん、此の程はかき絶え訪ひ給はず。曾我殿はましませども、一言の言傳に

二宮殿
二宮太郎。
兄弟の異父姉
の夫。

も預からず。一月に一度なりとも、父の御文とて、學問よくせよ、武勇するな、などといはれ奉らば如何ばかりか嬉しく恐しくもありなまし。何時よりも怨めしきは今年の暮戀しく見たきものは父の御文なり。とて、さめく、とぞ泣きける。心なき稚兒も、ことわりとや思ひけん俱に涙を流しけり。されば箱王は、新玉の年の祝言をも忘れ、新しき春の朝拜も物ならず思ひ焦れて、晝夜權現にまゐり、南無歸命頂禮、願はくは父の敵を討たしめ給へ、と歩を運びけるぞ無慙なる。(卷第四)

四 鞠子川の事

さて鎌倉殿は相澤が原に御座の由聞えしかば、此の人々も駒に鞭を添へて急ぎけり。道にて十郎いひけるは、名殘惜しかりつる

權現
箱根權現。元
箱根にある。

相澤が原
富士東麓の裾
野の總名。

故郷も一筋に思ひきりぬれば心のひきかへて、先へのみ急がれ候ぞや。時致聞きて、さん候。思ふ程は現過ぐれば夢にて候。心のまゝに本意を遂げ、浮世を夢になし果てて、早く浄土に生れつゝ、戀しき父、名残惜しかりつる母かく申す我等まで、一つ蓮の縁とならん。とて、ひっかけくうつて行く。十郎は、足柄を越えて行かん。と言ふ。五郎は、箱根を越えん。と言ふ。五郎、箱根



會我兄弟

鞠子川
今酒匂川といふ。相模國にある。

を忍び出て候ひし時は、權現にも御暇申さず、まして師匠にかくとも申さざりし事、今に其の恐残りて覺え候。と申しければ、十郎もさこそとて、箱根にぞ懸りける。鞠子川を渡りけるが、手綱搔繰り申しけるは、和殿三つ、祐成五つの年より、廿餘の今まで、此の川を一月に四五度づゝも渡りつらん。いかなる日なれば今渡り果てん事の悲しさよ。などやらん、いつよりも此の川の水濁りて候。心許なし。といひければ、五郎申すやう、皆人の冥途に赴く時は、物の色變り候とな。されば此の川の水、色變ると見えて候。とて、駒打入れけるが、稍ありて十郎。

さみだれに淺瀬も知らぬ鞠子川

波にあらそふ我がなみだかな

五郎聞きて、歌の心あしくや思ひけん、むかばきつづみ打ちならし

て、かくぞ詠じける。

渡るより深くぞたのむ鞠子川

親のかたきに逢瀬と思へば

かやうに思ひつらねて、通るところは、阿彌陀の院じゆ、かさま寺、湯本の宿をうち過ぎ、ゆさかの峠に駒を控へ弓杖突きて十郎申しけるは、人生れて三箇國にて果つとは理なり。われら生るゝ所は伊豆の國、育つ所は相模の國、最期所は駿河の國、富士の裾野の露と消えなん不思議さよ。」五郎聞きて、其の最期所が大事にて候ぞ。心得給へ。」といさむれば、仰せにや及ぶ。」と宣へどもさすが故郷の名残や惜しかりけん、我が故郷の方をはるゝと眺むれば只雲のみ懸り、何處をすることも知らねども、烟少し見えたるを、もし曾我にてや候らん。」といへば、團三郎だんざぶろうこれを顧み、烟は曾我にて候はず。それよ

り南の黒き森に、雲のかゝりて候こそは、曾我にて候へ。」と申しければ、古き事どもの思ひ出されて、十郎

曾我はやし霞なかけそ今朝ばかり

いまをかぎりの道とおもへば

とうち眺め涙ぐみければ、五郎此の有様を見て、此の人に同心しては、はかくしき事あらじ、いさめばやと思ひければ、怒り聲になりて、殿こそは、大磯・小磯、曾我故郷をも眺め給へ。時致には思ふ事こそ急がはしく候へ。」とて、駒ひき退け駈出し、一町ばかり駈通りぬ。十郎興さめて思ひながら、駒駈出し追ひつきけり。五郎ひきさがり、口説きけるは、人界じんがいに生を受くる者誰かは最期の名残惜しからで候べき。鬼王團三郎が心をも御恥ぢ候へかし。彼等をば曾我へかへし候べし。若し此の事叶ひて候はば申すにや及ぶ、仕損ず

るものならば、此の人々が、此處にては歌をよみ、彼處にては詩を詠じて、しもたてぬこと、なんと嘲られんも口惜し。いかばかりとか思し召し候。と申しければ、ことわりとや思はれけん、其の後は歌をもよまず、横目をもせずうちけるほどに、大くづれにこそ着きにけれ。(巻第七)

五 祐經討ちし事

さる程に、兄弟の人々、敵は討漏しつ、呆れて立ちたる處に、秩父殿の御内なる本田の次郎親經、具足さし固め、夜廻の番なりしが、庭上、今宵も餘しけるよ。と小聲に言ふ音しけり。いか様、伊豆駿河の盜賊の奴原にてあるらん、討止め高名せん、とおもひ、太刀の鏝元二三寸透し、足早に歩み寄りけるが、心をかへて思ふやう、一定曾我の殿原

秩父殿
畠山重忠。

の、日頃の本意を遂げんとて、夜晝つけ廻りつるが、左様の人にてもやと、障子の隙より忍びて見れば、案にも違はず、兄弟は敵のかへたる館を知らで、呆れてこそは居たりけれ。痛はしくおもひ、左衛門尉が伏したる館の妻戸を密におし開き、何とも物をば言はずして、扇を出して招きけり。五郎此の由きつと見て、本田が我等を招くは様こそあれと思ひ、松明わきに引き側め、廣縁につと上り、何事ぞや本田殿。とさゝやけば、本田小聲になりて、夜陰の苗字は詮なし。波にゆらるゝ沖つ船、しるべの山は此方ぞ。と言捨ててこそ忍びけれ。其所とも知らぬよるの浪、風を頼りの港入り、心有るよ。と戯れて、館の内へぞ入りにける。兄弟ともに立添ひて、松明振上げよく見れば、本田が教に違はず、敵は此所にぞ伏したりける。十郎敵を見つけて弟に言ひけるは、和殿は王藤内を斬れ。祐經を

ば祐成に任せよ。」とぞ言ひける。時致聞いて「愚なる御詞かな。我

我幼少より神佛に祈りし事は、王藤内を討たん爲か。此の者は逃げば逃すべし。立ち逢はば斬るべし。

祐經をこそ千太刀も百太刀も、心のまゝに斬るべけれ。早斬り給へ、斬

らん。」とて、勇み懸りて立ちたりけり。

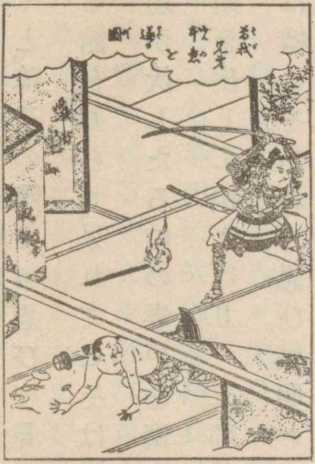
果報めでたき祐經も、無明の酒に酔

ひぬれば、敵の入るをも知らずして、

前後も知らずぞ伏したりける。

松明そばにさし置き、十郎枕に廻り

ければ、五郎は後にぞ廻りける。兄弟の人々は、祐經を中に置きて、



西王母
支那の仙女の
名。

各、目と目を見合せ、打領きて喜びけるぞ哀なる。三千年に一度花
咲き實なる西王母が園の桃、優曇華うだんげよりも珍らしや。優曇華をば
拜みて手折ると言ふなれば、それに譬ふる敵なれば、拜みて斬れや
斬れとて、二人が太刀を左衛門尉に當てては引き、引きては當て、七
八度こそ當てにけれ。やゝありて時致、此の年月の思唯一太刀に
と思ひつる氣色あらはれたり。十郎是を見て、待て暫し、寢入りた
る者を斬るは、死人を斬るに同じ。起さんものを。とて、太刀の切先
を祐經が胸元にさし當て、如何に左衛門殿、晝見參に入りつる曾我
の者ども参りたり。我等程の敵を持ちながら、何とて打解け伏し
給ふぞ。起きよや左衛門殿。」と起されて、祐經もよかりけり、「心得た
り、何程の事あるべき。」と言ひも果てず、起き様に枕元に立てたる太
刀を取らんとする所を、やさしき敵の振舞かな。起しは立てじ。」と

云ふまゝに、左手の肩より右手の脇の下、板敷までも通れとこそは
 斬付けけれ。五郎も、得たりやおう。」と罵りて、疊板敷斬り通し、下も
 ちまでぞうち入りたる。ことわりなるかな、源氏重代友切、何者か
 堪るべき、當るに續く所なし。「我幼少より願ひしもこれぞかし。
 妄念拂へや時致、忘れよや五郎。」とて、心の行くく、三太刀づゝこそ
 斬りたりけれ。 卷第九

歷代文學讀本 卷二終

大正十一年十月廿五日 印刷
 昭和四年九月二十三日 再訂
 昭和四年九月二十三日 再訂
 昭和五年二月十五日 訂正
 昭和五年二月十五日 發行

定 價	
卷一	金四拾九錢
卷二	金五拾二錢
卷三	金五拾四錢
卷四	金五拾八錢
卷五	金五拾二錢

編纂者

東京高等師範學校附屬中學校内
國語漢文研究會

發行者

東京市神田區駿河臺三丁目一番地
目 黒 甚

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者

根 本 力 三



歷代文學讀本 再訂版

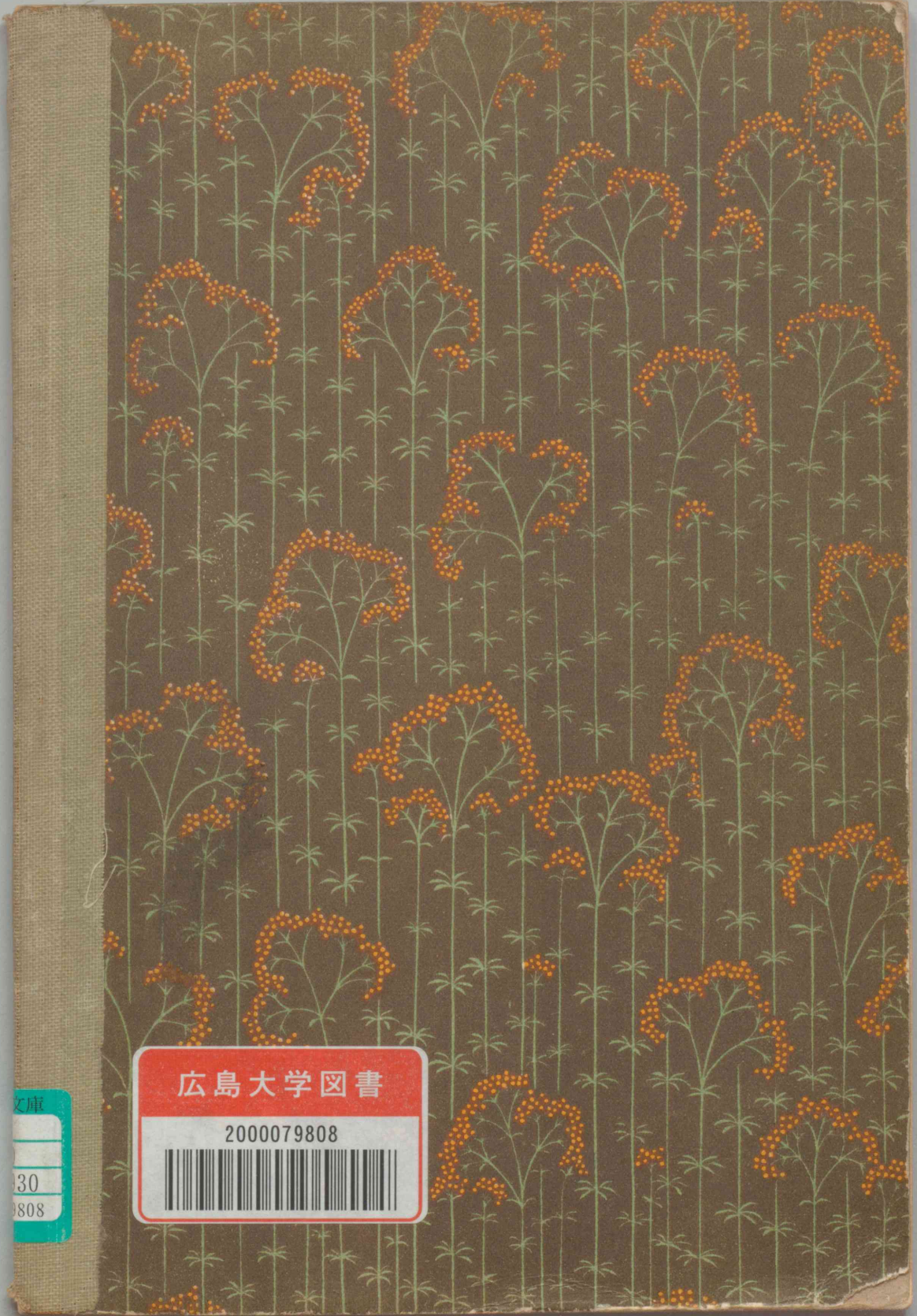


發行所

東京市神田區駿河臺三丁目
 新潟縣長岡市表町四丁目(本店)
 新潟市古町通七番町(支店)

目 黒 書 店

東京 電話 神田一〇五八番
 新潟 電話 長岡一八番
 新潟 電話 新潟九〇三番
 新潟 電話 長岡三六一九番
 新潟 電話 新潟四〇九〇番



文庫

30
808

広島大学図書
2000079808
